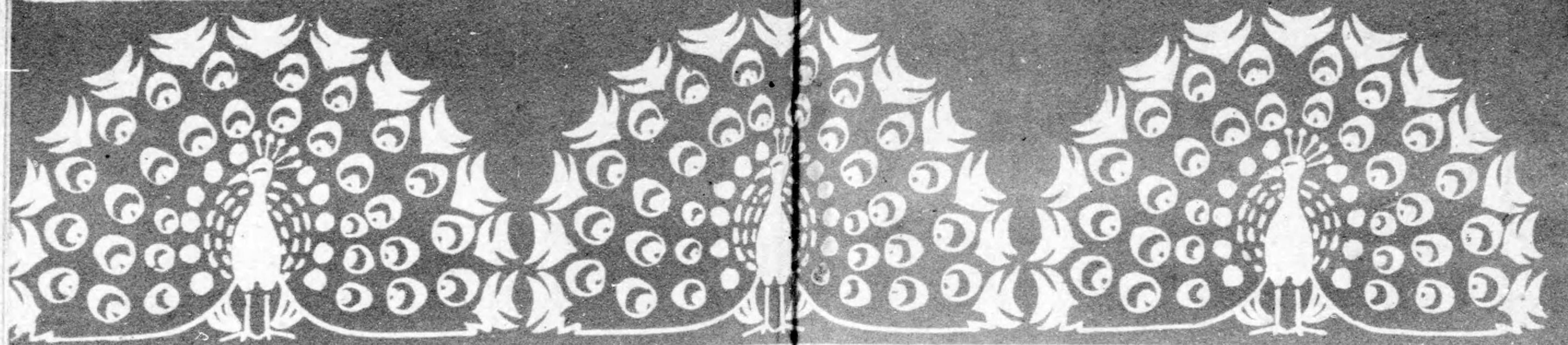


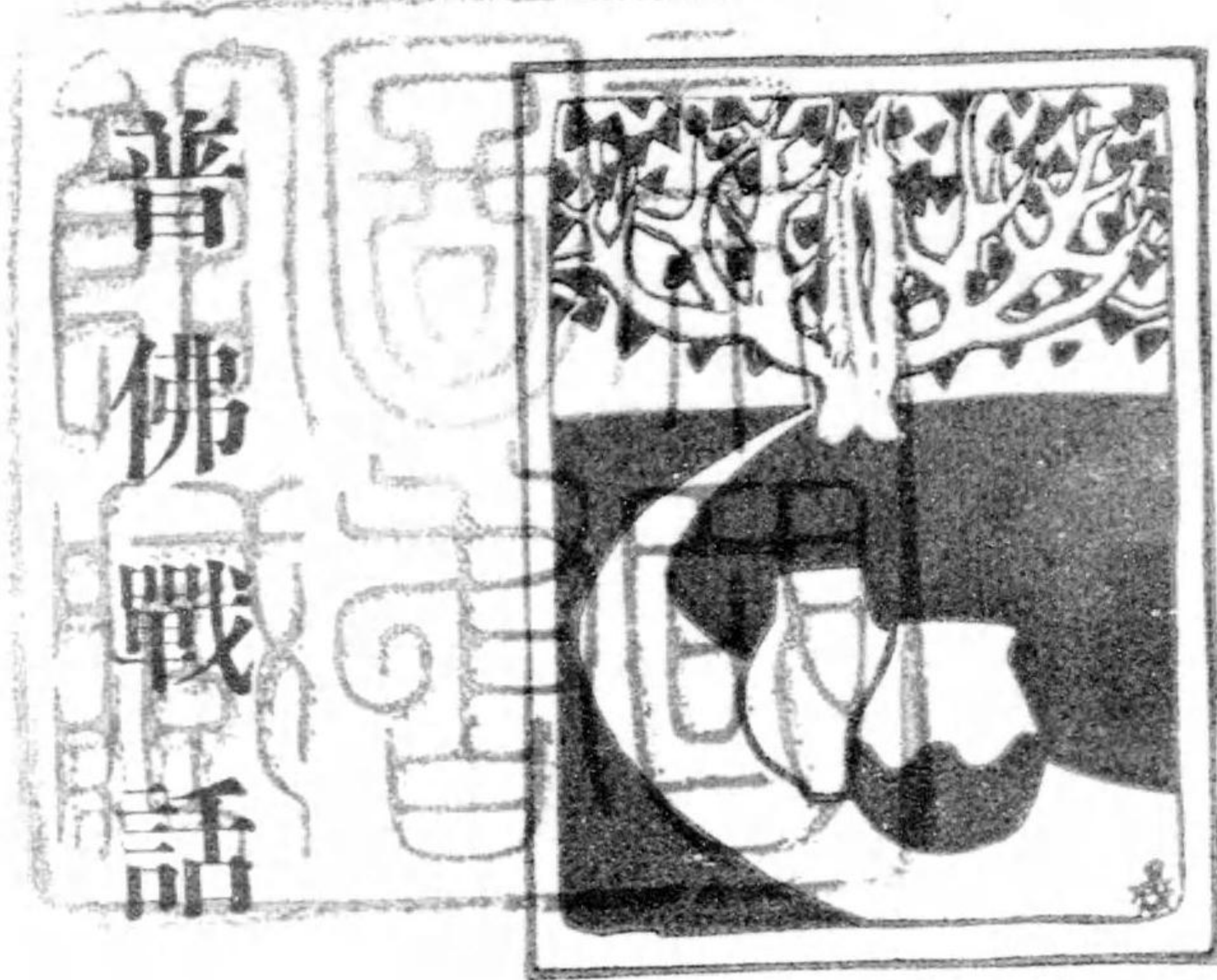
0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50^{16m} 1 2 3 4 5

始





持100
352



全

新
潮
文
庫

■ 第十一編 ■

後 下
藤 才
末 子
雄 工
譯 作

大正
3. 10. 22
内交

『新潮文庫』刊行の趣旨

近時譯書の刊行相踵ぐも、未だ一部の間に迎へらるゝに過ぎず、偶々購讀に易からしめて一般的要求に應ぜんとするものは、皆是れ原著の精神を没し去れる筋書梗概の類のみ。小社こゝに見るところあり、新たに『新潮文庫』を刊す。文學・哲學・科學・宗教・歴史等の各方面に亘れる泰西名著の邦譯にして、譯者各々平生傾倒するところ深きものに就き其の最善を致す。梗概にあらず、筋書にあらず、藝術的創作に至りては幾千頁の長篇尙ほ一字を苟くもせざる全譯たらしむ。正確と忠實と相俟つて現代譯書の定本たる可く、且つ繙讀携帶に便なる體裁となし、頒つて出版界極度の廉價を以てす。久しく一部専門の士の間のみ親しまれたる泰西の名著は、斯くして完全に一般的讀物たることを得ん。『新潮文庫』の期するところ即ちこゝに在り。

新 潮 文 庫 執 筆 者

(順はろい)

岩野泡鳴 稻毛詛風 生田長江 生田春月 馬場孤蝶 秦豊吉 長谷川天溪 本間久雄 戸川秋骨 片上仲 加能作次郎 米川正夫 吉江孤雁 高安月郊

中村吉藏 中村星湖 中村古峽 中村白葉 中澤臨川 中島清 生方敏郎 昇曙夢 野上白川 野上彌生 野尻抱影 大杉榮 楠山正雄 前田晃

後藤末雄 江馬修 阿部次郎 安倍能成 佐藤綠葉 相馬御風 木村幹 水野葉舟 島田青峰 島村抱月 廣瀬哲士 森田草平 鈴木悦

(目下交渉中の人々
は追つて弘告す)

序

これはアルフォンス・ドウデーの月曜小話から普佛戦争に關する物語を譯出したのであつた。なほ戦後、巴里に起つた騷擾の話も二つ三つ加へて置いた。

ドウデーの文は中々、六かしい。諧謔に富んだ筆致を寫すのは、とても私の手には往かない。極めて短時日の間に譯したので、誤譯や、脱落も多からう。相變らず未熟なものを高覽に供へた罪を謝して、諸賢の寛容に與かりたい。

大正三年十月五日

譯者 しろす

I
目次

次	目
最後の授業	一
球戯	一三
少年探偵	二三
母	四〇
伯林包圍	五三
不良守備兵	六九
巴里の農夫	八一
旗手	八九
シヤウパアンの死	一〇三
我が軍帽	一一一
コンミーマの鼓手	一二九

ア ル サ ス	一三
佛 蘭 西 の 妖 女	一三七
ペ ー ル ・ ラ シ ー ズ の 戦	一四六
渡 船	一四八
八 月 十 五 日 の 授 勳 者	一五五
前 哨 に て	一七六
ド リ ン グ ル 判 事 の 夢	一八八
朝	一九九

普佛戰話

(月曜物語より)

ドオデエ作
後藤末雄譯

最後の授業

(アルサス少年の話)

普佛戰話

その朝は學校へ行くのに、大へん遅れてしまった。アンメル先生が分詞のことを訊くと仰有つただけに叱られるのが大そう怖かつた。さうして私は唯だの一言も知らなかつた。授業を休んで畑を散歩しようといふ考が、ちよつと胸に浮んだ。天氣は大そう温くつて、からりと晴れてゐた。鶉の群が森ぎはで鳴くのが聞えてゐた。さうしてリツベル牧場で、挽材工場の

後にあたつてプロシヤ兵の教練をやる音が聞えてゐた。斯等のものが、何もかも分詞の規則よりも私の心を誘つた。けれども此の誘ひに手向ふ力を持つてゐた。さうして私は學校を指して、どん／＼駈けていつた。

村役場の前を通ると、鐵柵には掲示が掛つてゐて、そばに人だかりがしてゐるのが目に就いた。二年まへ、敗戦、徵發、などあらゆる凶報の來たのは其處からであつた。私は、

「まだ何があるんだらう」

と考へたが立ち留らなかつた。それから、廣場を駈けぬけてゐると、鍛冶屋のヴァリテさんに出逢つた。彼は小僧を連れて、其處に居ながら、掲示を讀んでる最中であつた。さうして、彼は、

「あんまり急ぐなよ。お前は何時でも學校へ大分早く着きなさるよ。」

と大聲で言つた。彼が私を戲かつたのだと思つた。さうして息せき切つてアンメル先生の小さい運動場に駈け込んだ。いつもは授業の初まりには、開けたり、

締めたりする机、能く聞かうと思つて、耳を聳てながら、皆んな一緒に繰り返す學課「些し静かになさい、」と能く机を叩く先生の太い鞭など、往來へ聞えるほどの大騒ぎが起つてゐた。

私はこの大騒ぎを當にして、見附からずに席に就かうと思つてゐた。併し、一度、この日にかぎつて、日曜日の朝のやうに皆んな森としてゐた。開け放した窓からは、もう、ちゃんと席に就いた學友が見えてゐた。怖しい鐵鞭を抱へて、往つたり、きたりしてゐるアンメル先生の姿が目についた。戸をあけて此の森としたなかに這入らなければならぬ。私は赤い顔をしてゐたか、何うか、また怖かつたか、何うかは、諸君も御考へが附かう。

ところがアンメル先生は怒らずに私を見つめて、大そう優しく仰有つた。

「フランツさん、すぐ席へお着きなさい。貴方がゐなくつても授業を始めようとしてゐたのです。」

私は腰掛を跨いだ。さうして直ぐさま私の席へ就いた。すると、私の怖さが、

稍々静まると、先生は青い禮服を着てゐて、參觀日か、賞品授與式の日でなければ着けない縁取りの黒絹の洋袴ズボンや、美しい襜のついた縁取りの襯衣シャツまで着けてることばかりが目にと留まつた。のみならず教室中が、唯ただならぬ、嚴かな様子をしてゐた。けれども一ばん私の驚いたのは、村の人達が教室の奥の方で、何時も空席になつてゐる腰掛に、私達と同じく静肅に坐はつてゐるのを見かけたことであつた。それは三角帽子を持つたオーゼ老人は、前の市長、昔の仲買人と其れから猶ほかの人達であつた。此の人達は皆んな揃つて悲しい様子をしてゐた。オーゼ老人は縁の蟲むしに喰はれた、古い初等讀本を持つて來てゐた。

老人は膝の上に、大きく開いたまゝ其本を載せてゐて、その横に大きい眼鏡が置いてあつた。

私が是の様子を見て、驚いてゐるうちに、アンメル先生は教壇に上がった。先生は私を迎へて下すつたと同じ、優しい、嚴かな聲で、

「皆さん。唯今が、皆さんに教へ申す最後の時で御座います。アルサスと

ローレン州にあります學校では獨逸語ばかり教へろといふ命令が伯林から參りました。……こんどの先生は明日、入らつしやいます。今日は、皆さん方が佛蘭西語を學ぶ最後の稽古です。どうぞ能く注意してゐて下さい。」と私達に仰おしや有つた。

僅かな此の言葉が私を仰天させてしまつた。

嗚呼、不愜な人達だ。あの人達が村役場に揭示したのは此事であつた。

佛蘭西語の最終の授業……

私はやつと書ける許りだ。もう是から決して習へない。それゆゑ佛蘭西語もそれきりで御仕舞の筈だ。……もう今になると、これまで無駄にして來た時間や、鳥の巢を探しに駈けて往つたり、サアルに氷滑をやり往つて缺席したことが、如何ほど惜しかつたらう。つい先刻さつきまで、あんなに嫌やだと思はれ、そして、持つのも重かつた教科書も、文法書も、宗教史も、今は古馴染ふるなじみのやうに思はれて、別れるのが切ないらしかつた。それはアンメル先生に別れるのと同じであつた。先

生が御出發なさるといふ考と、もう御目に掛るまいと思ふ考は、御處刑も、鞭に打たれたことも忘れさせてしまった。

ほんとに御氣の毒な方だ。

先生が日曜用の立派な着物を御召しになつたのも、斯かる最後の授業に敬意を表するせゐであつた。今になつて見れば、村の老人連がやつてきて、教室の片隅に坐はつてゐる譯も解つた。幾度もこの學校へやつて来て教室に臨まなかつたのを後悔してゐると言ふ風であつた。それは、私達の先生に四十年間の善良な勤務を感謝する方法らしかつたし、又亡びかけてゐた故郷に老人めいゝの義務を盡す仕方とも思はれた。

斯んなことを考へてゐると、私の名が呼ばれるのが耳に就いた。私が誦誦する番になつた。大それた高く、はつきりと一の間違もなくあの名高い分詞規則の誦誦を、審かに述べる事が出来たなら、何んでもやつてしまひたかつた。併し私は最初の言葉に、まごついてしまつた、さうして私は頭が上げられず、悲しくつ

て、腰掛のなかで身體を揺すりながら立つてゐた。するとアンメル先生が、私に仰有るのが聞えた。

「フランチッさん、お前を叱らないよ。お前は十分罰せられる筈だ……そりや斯うだ。毎日々々「やあ、閑だ。明日、稽古しよう」と誰れでも言つてゐる。これから起ることはお前にも解らう。……いつも我々が、アルサス人の教育を明日に延ばしたことは、我が州の大不幸であつた。今、あの人は、「なにお前は佛蘭西人だと強情をはるのか、自分の國語を話したり、書いたりすることは出来ないくせに……」と言ふ權利を持つてゐるのだ。とにかく一ばん罪が深いのはお前ではない。私達は皆誰も、自分を責むべき科を澤山持つてゐる。

皆さんの親達は、子供が教育されるを左ほど心底から望んではゐなかつた。皆さんを畑仕事に送つたり、又は紡績場に送つて、幾らか餘計に取らせる方が好きであつた。私自身も己を責むべきことが聊かも無からうか。

私も皆さんを勉強させるかたはら、家の庭に水を撒かせた事が幾度もあつたではありませんか。私が香魚を釣りに往きたかつた時には、皆さんを休ませるのに躊躇ためらひましたか……」

するとアンメル先生は、佛蘭西が世界中で、一ばん明白な、一ばん確實な、一ばん美しい國語で、一國民が奴隷となつても、自國の言葉を維持してゆく間は、牢屋の鍵を持つてゐるものであるから、飽くまで佛蘭西語を我々の間に保つて、決して忘れてはならないと言ひながら、其れから其れへと佛蘭西語で話しだした。

それから先生は小さい文法の本を取り上げて課業を讀んで下すつた。私は、大そう解つた事を考へると我ながら驚いた。先生の仰おつしや有つたことは大そう容易やさしいやうに思はれた。さうして私は是ほど能く聽いたことはないし、先生も、これほど我慢して説明なすつたこともなかつたと私は信じてゐた。隣れな先生は、故郷を立ち去られる前に、御自分の知識を、すつかり私達に授けて、たつた一度で頭の中に入れさせたのだとも言はれよう。

稽古が済むと書方に移つた。その日先生はすつかり新しい例題を用意してゐらしやつた。その題の上には、フランス、アルサス、フランス、アルサスと美しい圓形の字で書いてあつた。それは机の鐵線に掛つて、教室の廻り中で繖かさへる小旗の様な形を拵へた。各生徒が、どれほど勉強してゐるか見なければならなかつた。何といふ静かなことだらう。紙の上に軋おしむペンの音より他には何んの音も聞えなかつた。すると、黄金蟲が這入つてきた。併し氣を取られたものは一人もなかつた。また佛蘭西語だといふやうに覺悟して、棒ばかり引いてゐる極く小さい生徒さへ氣を取られなかつた。……学校の屋根瓦の上では、鳩の群が極く微かに囀つてゐた。さうして私は、其の鳴聲を聞きながら、

「鳩でも獨逸語で鳴かせなければならぬのか」と怪んでゐた。

とき／＼頁の上から目を舉げて見ると、アンメル先生は教壇ちやうに凝ことしてゐて、この小さい校舎を目的のなかに入れてしまひたいやうに、身の廻りのものを見詰めて

ふらつしやるのが、目に這入った、……考へて御覽なさい。四十年このかた、先生は相變らずの教室に臨み、運動場に向ひ合つて、いつも同じ場所に居らしたのであつた。唯だ腰掛と机とが使はれたせゐで、手擦れて磨かれてしまつた。運動場の胡桃は大きくなつた。先生が手植の葎草が、今は窓から廂まで飾つてゐた。斯様なものから残らず離れることは、この憐れな先生に取つては、どれほど心の千切れることに違ない。また鞆を締めながら、二階の部屋で往つたり來たりしてゐる御妹さんの足音をきくのは、先生にとつて、どれほど切ないことだらう。何故と言へば、明日出發して、永遠に故郷と離れなければならないからであつた。併し先生は終まで授業をして下さる勇氣があつた。書方のあとで、歴史の稽古をやつた。それから小さい生徒達はバ・ブ・ビ・ボ・ブと一緒に繰り返した。教室の奥ではオーゼ老人が眼鏡をかけてゐた。さうして兩手に初等讀本を持ちながら、子供と一緒に字を讀んでゐた。老人も勉強してゐることの目に就いた。老人の聲は感激から震へてゐた。其聲を聞くと、皆な笑ひたくつて泣きたいほど可笑しかつた。

あゝ、私は永く最後の授業を覺えてゐよう……
俄かに教會の時計が正午を打つた。それからアンシエリユスが聞えた。それと同時に練兵から歸つてきた普西亞兵の喇叭が、學校の窓下で響きだした。……ア
ンメル先生は眞青な顔をして教壇に立ち上がった。これほど先生が堂々と見えたことはなかつた。

「皆さん、皆さん、私は……私は……」
と先生は仰有つた。

併し何物か先生の胸許を詰らせた。先生は文句を續けることが出来なかつた。それから先生は黒板の方へ振り向いて、白墨を取つた。さうして力一杯に出来るだけ大きい字で、

「佛蘭西萬歲」

と書きつけた。

それから壁に頭を寄せながら教壇に残つてゐた。さうして無言のまま、

「もう斯れまでだ……お歸んなさい。」
と御手で合圖あひづをなすつた。

球 戲

二日このかた戦つて、篠突く雨に打たれながら、背囊せふほを脊擔つたまま、夜を過したので士卒は疲れきつてゐた。街道の水溜りと、濡れた畑の泥なかで、武器を足許あしもとに置いて、兵卒達は、大事な三時間を過してしまつた。

彼等はびしょ濡れの軍服を着たまゝで、幾晩も過し、疲労から身體が、だるくなつてゐたので、温を取つて、元氣を回復するために、身體を詰め合つてゐた。隣の兵の背囊に寄り懸つて立ちながら寝てゐる兵卒もあつた。疲労と缺乏とは、睡眠の中に溺れて、だるんだ顔の上によく現はれてゐた。雨と泥ばかりで火もなく、吸ス物もない。黒い空は低くたれて、あたりには敵の氣配けはいがしてゐた。それは不意で

あつた。

彼處では何をしてゐるのか、何事が起つてゐるのが、砲列は砲口を森に向けて何かを待つてゐるらしかつた。待伏まちかまをしてゐる機關砲は、凝ぢぢと地平線を見つめてゐた。何物も攻撃の用意をしてゐるらしかつた。何故なぜ、攻撃をしないのか。何を待つてゐるのか……

人々は命令を待つてゐた、司令部は命令を送らない。

然し司令部は遠くない。司令部はルイナ三世式の美しい城であつた。城シヤウの赤い煉瓦は雨に洗はれて土臺の半腹に輝いてゐた。ほんとに貴顯の住むべき御殿で佛國元帥旗を立てるにふさはしい。大きな堀と石の手摺とが芝地を街道からはなしてゐた。其の堀と石の欄の後では緑キナのなめらかな花の咲いた鉢に飾られた芝地が石段まで直眞まっすぐに上つてゐた。片方を見ると、建物の奥深い方では、小徑こみちが明るい抜穴を拵しらへてゐた。池には白鳥が遊あそんでゐて鏡のやうに擴がつてゐた。塔の形をした大きい鳥籠の屋根裏うらには孔雀と錦雞とが葉蔭で鋭い鳴き聲を立てながら羽ば

たきをしたたり、羽を擴げてゐた。持主は立ち去つてしまつたが、其處には打ちちやり放しにして置くといふ感じはしてゐなかつたし、戦争のせいで萬物を打ち棄て、仕舞ふといふやうな気分はしてゐなかつた。

軍司令官の小旗は芝地の極く小さい花まで保護してゐた。戦場の直ぐ側でも物ごとの秩序と、土臺の眞直まっすぐな線と、小徑こみちの靜かな奥深さから生ずる、斯かる靜寂を見出す事は何となく心の打たれる事であつた。

彼方の道では、あんなに厭いやな泥を積み上げて、あんなに深い轍わだちの跡を掘りつける雨も、此處では煉瓦の赤みと芝地の緑の色を添へ、椶樹の葉と白鳥の白い羽根を輝かす美しい、雅みやびやかな俄雨に過ぎない。萬物が輝いて、快かつた。實際屋根の上に翻ひらへる旗と二人の哨兵が居なかつたら司令部といふ氣持に決してしまい。軍馬は厩うまの中で休んでゐた。其處彼處で炊事場の廻りをうるつく從卒にも出遇つたし、赤い洋袴ズボンをはいて大きい庭の砂地に、そつと耗把を動かしてゐる園丁の顔を見かけた。

石の上り段に向つた食堂では、あらかた食事のすんだ食卓が皺だらけの食卓掛におかれた、口を抜いた壘や、曇つた青白い空おき洋盃コップが、皺のよつた食卓懸けの上に置かれて、食事は終つて御客はゐなかつた。隣室には聲高い話し聲や、笑聲や、轉がる球の音や、衝きあたる洋盃コップの音が聞えてゐた。元帥は球突たまつきの遊びをやつてゐる最中であつた。其故、軍隊が命令を待つてゐたのであつた。元帥が球突をやりに始めた時には天が流れてしまふかも知れない。世界中の何物も遊びの終る邪魔をする事が出来ない。

球突たまつききただ。

其れは此の偉い軍人の缺點であつた。彼は球突にかけては氣を引立てられて頬骨をふくらまし眼を輝かし、食事と遊びと酒とに眼を輝かし、胸をはつて、戦場に臨むと同じ程、眞面目であつた。傳令士官は恭々しく元帥を取り巻いて、元帥が一突き突く毎に氣を失ふほど賞めはやしてゐた。元帥が一點突くと誰も争つてゲーム板の方に駆けて行つた。最も美しい庭園に向いて明け放した、柵作りの高い

部屋の中で、肩章と羽根の前立と、勳章と側條とが動いてゐた。斯かる嬉しげな微笑と、廷臣めいた敬禮や、澤山の縫取りや、新しい軍服を見ると、コンピエーギユの秋を思ひ起さして、外套をきた兵士を些し静めた。その外套は道に沿うて凍え、ぬるき雨に打たれて大そう軍隊を物悲しく思はせた。元帥の對手は血色の好い、髪のぢぢれた、白手袋をはめた小柄の參謀大尉であつた。彼は球突きの名手で、世界中の元帥を誰でも敗かすことが出来た。然し彼は其の長官から恭々しく間を隔てながら、向ひあつて點を得ないやうに、又餘り容易く敗けないやうに勉めてゐた。これこそ謂ゆる將來有望の士官だ。氣を附け給へ。青年士官、しつかりし給へ。元帥は十四點取つた。君は十點取つた。其れは斯ういふ風に最後迄遊戯をやるの問題だ。來もしない命令を待ちながら地平線を漂はす烈しい雨の下に、側條を着けて、綺麗な軍服を汚すよりも君の内にゐる方が、昇進のために甲斐が多からう。

球突たまつききはほんとに面白い遊びである。球は轉ころがつて、觸れ合ひ、色合ひを混ぜ

合ふ。コシンが好く跳ね返して、羅紗が熱くなつた……

俄かに砲火が空を通つた。耳を聳するやうな響が窓硝子を震はした。皆んな震へてゐた。人々は心配さうに顔を見合した。唯だ元帥ばかりが何物も見えなかつたし、聞きもしなかつた。球突臺に倚りかゝつて元帥は立派な引球を突かうとする眞最中であつた。引球は元帥の得意であつた……

併し又砲火が聞えた。やがて復た響いた。砲火は續いて烈しくなつてきた、傳令士官は窓に駈け附けた。プロシヤ兵が攻撃しようか。

「さあ攻撃するなら攻撃しろ。大尉、貴様の番だ」と元帥が白墨を棒にぬりながら云つた。

參謀大尉は元帥の突き榮えに感心して身を振はして居た。伏兵に遇つても眠つて居たチウレンは此の元帥に取つては何んでもなかつた。元帥は戦闘の瞬間にも球突臺を前にして落着いてゐた。そのうちに砲火が盛になつた。大砲の振動は、機關砲の亂射に、小隊の銃の響きに混じつて居た。縁の黒い、赤い雲が芝地の端

に昇つた。庭園の眞奥が焼けた。孔雀や錦雞が驚いて鳥小屋の中で鳴いてゐた。アラビヤ馬は火薬の香ひを嗅ぐと、厩の奥で身體をもぢつてゐた。司令部は動搖し始めた。通信は通信に續いた。傳令使は手綱を落して到着した。元帥に尋ねた。元帥は振り向きもしなかつた。私が其遊びを終る迄は何物も止める事が出来ないと言つた通りであつた。元帥は、

「大尉、貴様の番だ。」

といつてゐた。

併し大尉は氣を奪はれて居た。やつぱし若いからだ、もう彼は今になると狼へて遊びを忘れてしまひ、眞面目に突いてゐた。そのせゐで大尉はあらかた勝つてしまつた。今度は元帥の方が自烈だした。驚きと憤慨が彼の雄々しい顔の上に現れた。ちやうど此の時、泥塗みれになつた一騎の傳令使が命令を犯して、一飛びに石段を飛越えた。

「元帥閣下、元帥閣下……」

此の傳令使が如何なる取扱ひを受けたか、調べなければならぬ……
 元帥は怒りからふくれ上つて、雄雞のやうに赤くなり、球突きの棒を手にしな
 がら、窓口に現れた。

「何事が起つたか……何事だ……此處いらには哨兵が居ないのか。」

「併し元帥閣下……」

「よし……ぢきだ……己れの命令を待つて居ろ……」

窓は荒々しく閉しまつた。

元帥の命令を待つて居なければならぬのだ。

此の憐れな人達のする事は善かつた。風は雨を拂つて正面の散彈を拂つて呉れ
 た。外の大隊は運動を停止する譯が解らず、武器を手にしたまゝ役に立たなかつ
 た間に、多くの大隊は全滅してしまつた。仕方がない命令を待つて居るのだ……
 例へば死ぬのに命令を要しないから、士卒は静かな大きい城に對して、草叢の蔭
 で堀なかに、群をなして落こつてしまつた。士卒は堀に落ちると機關砲が彼等を

粉々こなごなにした。彼等の傷口から佛蘭西國の勇ましい血潮が、音も立てずに流れて居
 た……

二階の球突室では、なほ恐ろしく逆上のぼせてゐた。元帥は又おひ越した。併し小
 さい大尉は獅子のやうに防いだ……

十七、十八、十九……

點を採るや否や、戰爭の響きが近づいた。元帥はたつた一點餘計に採りたかつ
 た。

もう榴彈が庭に達した。もう一彈が池の表面に落ちた。水の鏡が亂れた。血だ
 らけの羽根を渦卷かせながら、一羽の白鳥が驚いて泳いでゐた。其れが最後の一
 發であつた。……

もう今になると森閑として唯雨がイヌタデの叢に注ぐばかりで、丘の後ろには
 騒がしい音が聞えてゐた。濡れた道ばたには喘ぎ行く羊の群れの足音らしい響き
 が聞えるばかりであつた……

軍隊は、すっかり敗北してしまつた。元帥は球突に勝つた。

少年獨偵

その子供は、ステンヌといつて居た。それは病身で顔色の青白い、巴里生れの子供であつた。十になつてゐたかも知れない。多分十五になつてゐたかも知れない。斯んな子供達の年頃はなかく解らない。

母親は死んでしまつた。父親は昔の水兵であつたが、名高い寺院内に柵園をもつて居た。下女や腰のまがつたお婆さんなど、人道で縁をとつた花園に置いた車のかげに来て坐はる巴里の貧乏人は、誰でもステンヌの親爺を知つて居て、尊敬して居た。此親爺の荒々しい鬚は犬を恐はがらせ、乞食どもを恐れさせたが、そのかげに優しい、母親めいた微笑が隠れて居ることを誰も知つてゐた。此微笑を

見ようとするには

「坊ちゃんの御機嫌はどうだね。」

と此の親爺おやぢに言ひかけさへすれば好い事を皆んな知つて居た。

其れ程、親爺は子供を可愛がつてゐた。學校の退けた午すぎ、此の子供が親爺を連れに来て、二人揃つて並木道をまはり、椅子毎に立ち止つて、椅子に腰かけてゐた人々に挨拶し、其の親切の様子に答へる時には、眞まことんと嬉しかった。

巴里が包圍されたので、運悪く萬事變つてしまつた。ステンヌの親爺の柵園は閉められて石油を注がれた。可哀さうな親爺は、絶えず見張をしなければならなかつた。淋しい、頹たふれた土臺の中で煙草も吸すはす、一人ぼつちで暮して居た。さうして夜遅くでなければ家の中で、子供に遇ふ事が出来なかつた。其故、プロシヤ人の話しをする時には、親爺の鬚を見ては機嫌を伺はなければならなかつた……

子供のステンヌは此の新しい生活に餘り不平を霑こぼさなかつた。

包圍。其れは惡戯いたづら子供に取つては大そう面白かつた。もう學校もない。相互教

育もない。始終、休暇で、町は市場のやうだ……

子供は晩まで、戸外あそびで駈けてゐた。彼は立派な軍樂隊の附いた大隊を擇んで、要塞に行く土地の大隊に、くつついて行つた。此の子は軍樂隊のことにかけては大へん委しかつた。彼は、九十六聯隊の軍樂隊は、から駄目だが、五十五聯隊の軍樂隊は、すばらしいと能く言つて居た。時には別働隊が練習するのを見て居た。

子供は籠を抱へながら長い軍列に附いて行つた。其の列は霧のない冬の朝、肉屋や、パン屋の鐵格子の前に集つて居た。其處で水の中に足を入れながら人と近ちかづきになつたり、また政事の話をして居た。ステンヌ親爺の子供なので、めいめい彼に意見を求めた。併し一番面白い事は、やつぱし錢落しの遊びであつた。それは名高いガロシユの遊びで、包圍中にブルターアギユの別働隊が流行はやらしたのであつた。子供のステンヌは要塞にも、パン屋のゐない時には、シャトー・ドー廣場のガロシユ遊びの仲間なかまにゐるのにきまつてゐた。子供は勿論、賭かけない。

遊ぶには大變な金が入用なのだ。子供は遊ぶ人達を見てゐる丈で満足してゐた。中でも青い短着みじかぎを付けて二圓の金貨ばかり賭けてゐる大きい子供が、ステンヌに偉えらさうに思はれた。此の男が賭けると短着の内懐うちぶとこで、ちら／＼錢のなる音が聞えた。

或る日、子供の足許まで轉がったお金を拾ひながら、此大きい子供が小聲で、

「欲しいかい……どうだい、氣がするなら、お金の有處ありかを教へてやらう。」
と子供にいつた。

遊びがすんでから、その大きい子供ステンヌを廣場の片隅に連れて行つて、プロシヤ兵に新聞を賣りに、一緒に來いと云つた。旅行するのに三十フランもつて居た。先づ子供は大へん憤慨して斷はつた。それから彼は遊びの場所にも歸らず三日留まつて居た。其れは恐ろしい三日であつた。彼は寝もしなかつたし、喰べもしなかつた。夜、彼は寢臺の足許に澤山のガローシユと二圓の金貨なひらが平に積んで、ギラ／＼動いてゐるのを見た。誘惑は強かつた。四日目に彼はシャトー・ド

ーに歸つて、其の大きい子供に逢つた。さうしてだまされるまゝになつて居た……

或る雪の朝、大きい子供とステンヌは布ぬいの袋かぶを擔ぎ、新聞をブルースの下にかくして、出かけて行つた。彼等がフランドルの近くに着いた頃、やつと夜が明けた。すると彼はステンヌの手をとつた。さうして番兵に近づきながら——番兵は勇敢な常備兵で、赤い鼻をして、人の好い様子をして居た——大男は憐れな聲を出してつた。

「番兵さん、通して下さい……家の阿母おつかさんが病氣で、阿父さんは死にました。私は畑に馬鈴薯を取りに弟と一緒にいきます。」

大きい子供は泣いて居た。ステンヌは恥かしくてたまらなく、首を低たれてゐた。

番兵は、一寸彼等を見つめて、人影のない、白い街道を、ちらと見まはした。
「早く行け。」
と番兵は身をかはしながら言つた。さて二人はオーベルピリエの家に這入つた。

笑つたのは大きい子供であつた。

夢でも見て居る様に、子供のステンヌは兵營に變はつた工場や、濡れた廢物をつけた防障や、霧を破つて、空に聳えた空虚な、壞はれた、長い煙突を見詰めてゐた。彼方此方には歩哨がゐて、外套の頭巾を被つた士官達が、小さい望遠鏡でながめてゐた。消えかけの焚火に溶けて行く雪に濡れた。小さい幕舎もあつた。あの大きな子供は、道をよく知つてゐて、歩哨小屋をよけるために、道を横ぎり始めた。併しよけることが出来ずに、二人は、壯兵隊の大きい歩哨小屋に着いた。壯兵隊はツアワツソンの鐵道線路に沿うて、水の満ちた堀の奥にうづくまつてゐた。今度は大きい子供がさつきの言葉を繰り返しても、甲斐がなかつた。哨兵は彼等を通したくなかつた。すると二人が悲しんで居た間に踏切り小屋から、眞白な髪をした、皺だらけの老軍曹が、鐵道線路に出て來た。其軍曹はステンヌの父親に似てゐた。

「さあ、お前達、もう泣くなよ。馬鈴薯を取らせに入れてゐる。だが其の

前に這入つて些し温まるがいゝ……此子は凍えて居るらしい」

あゝ子供のステンヌがふるへて居たのは寒さのせゐではなかつた。恐しさ、恥かしさからであつた……營所の所では、二三人の兵卒が淋しい火の廻りにうづくまつて居た。ほんとに物淋しい日であつた。彼等は銃劍の先にビスケットを附けて煽にかざして凍つたのを、とかしてゐた。兵卒は子供を入れてやる爲めに膝を詰めた。兵卒は二人に少し珈琲の這入つた水をやつた。二人が飲んで居ると、或る士官が戸口にやつて來て、軍曹を呼んだ。さうして彼に低聲でいふと、すぐさま立ち去つた。

軍曹は晴やかな顔をして、歸つて來て、

「……今夜は御馳走があるよ。……プロシヤを襲撃した。……こんどこそ

はフウルジエを取り返さう……」

すると譽め聲と笑ひ聲が一時に聞えた。人々は踊つたり、歌つたり、銃劍を磨き合つた。此騒ぎにつけ込んで、大きい子供とステンヌは見えな、なつてしまつた。

堀を越えると、もう野原があるばかりで、其の奥には、銃眼の開いた白壁があった。二人は馬鈴薯を拾ふ眞似をしながら、一足毎に立ち止まつて、此の壁の方に歩いて行つた。

「歸らう……もう行くのは止さう」

と始終、子供のステンヌは言つてゐた。

大きい子供の方は肩を聳かしていつも進んで行つた。突然、銃に弾丸を込める音が聞えた。

「寝ろ」

と大男が地面に身を投げ出して言つた。

一へん寝ると、彼れは口笛を吹いた。ほかの口笛が雪の上で答へた。二人は這ひながら進んで行つた……壁の前で汚れた大黒帽子の陰になつた黄い二つの顔が現れた。大きい子供はフロシヤ兵の側の堀中へ飛び込んだ。

「己の兄貴だ」

と其の仲間を指した。ステンヌは大變小さかつた。其れだから彼を見ながらフロシヤ兵が笑ひ出して、堀の破口まで彼を上げてやる爲めに、取り出してやらなければならなかつた。

石がけの一方には、大きな、土手と、倒した樹木と、雪の中で眞黒に見える穴があつた。穴の一つくゝに同じ大黒帽子を被ぶつた黄い髯の男が居て、子供の通るのを見ながら笑つてゐた。

片隅には樹の幹で弓形をした植木屋の家があつた。其の下には兵隊が満ちて居た。兵隊は歌留多をやつてゐて、澤山な、眞赤な火の上で肉汁をこさへてゐた。白菜、豚肉などの好い香がして居た。壯兵隊の露營とは大違ひであつた。二階には士官達が居た。士官達のピアノを弾くのが聞えたし、シャンパンの瓶を抜く音が聞えた。巴里生れの大男と子供のステンヌが這入ると、ウラといふ聲が迎へた。二人は新聞を與へた。其れから人は、彼等に酒を飲まして話をさせた。士官達は誰も高慢ぶつた。人の悪い様子をしてゐた。併し大きい子供は、市外の面白

い様子をしたり、ウアエ、の言葉で彼等を面白がらせた。彼等は笑つて、彼のあとから言葉をくりかへし、巴里から持て来た泥の中に、可笑しくつて轉がつて居た。

子供のステンヌも話したかつた。さうして彼れは馬鹿でないことを知らせたかつたが、ふとした事が妨げた。彼の正面に向つた放れた所に、プロシヤ兵が立つて居た。此の兵士はほかの兵士より年を取つて居て、他人よりも眞面目であつたが、本を讀んで居た。寧ろ讀むふりをしてゐた。なぜといへば、彼の目が子供を離れなかつたから。此の人もステンヌと同じ年頃の子供を故郷にもつて居る様に、彼の目の中には情愛と譴責があつた。さうして

「私の子供がこんな仕事をするのを見るよりは死ぬ方がましだ。」

といふらしかつた。

此の時からステンヌは、手のやうな物が彼れの心の上に置かれて、動悸を妨げて居るやうな氣がした。

此の苦しみを逃がれようとして、彼は酒をのみだした。やがて萬物が身の圍りで動きだした。此の大きな笑聲の最中に、仲間の大きい子供が、練兵の仕方に就いて國民軍を冷評したり、マレーで武器をとる眞似をしたり、城塞に關する夜の警報を眞似る聲が茫々やり聞えた。

其れから大きい子供は低聲になつた。士官達は近寄つた。顔つきは眞面目になつた。無頼漢の大男は佛國壯兵隊の攻撃を知らせて居る最中であつた……

すると子供のステンヌは、怒つて立ち上つた。

「さうぢやない……私はいやだ……」
といつた。

併し大きい子供は笑はせるばかりで言ひ續けた。大きい子供は話しきらないうちに士官達は皆んな立ち上つた。ひとりの士官が戸口を指さした。

「……陣營から……」

と彼は士官たちに言つた。

さうして二人は、獨逸語で早口に、ひそくと話し出した。大きい子供は金を鳴しながら大統領のやうに高慢ぶつて出て行つた。ステンヌも首を低れて、跡から蹤いて行つた。ステンヌを大變困らせた眼つきの普西亞兵の傍を通つた時に、

「バ・コリー・サ……バコリー」

といふ悲しい聲が聞えた。

涙が眼に湧いて來た。

一旦野原に出ると、大きい子供とステンヌは駈け出して、早く家に歸つた。袋の中にはプロシヤ兵の呉れた馬鈴薯が満ちて居た。其れを持つて彼は無事に佛國壯兵隊の壕を通りすぎた。其處では夜襲の用意をした居た。軍隊は胸壁の後ろに集つて靜かに到着した。あの老軍曹は、大それたらしい様子をして兵卒の位置をきめて居た。大きい子供とステンヌが通りすぎると、老軍曹は二人を認めて、やさしい笑を送くつて呉れた。

此の笑ひは小さいステンヌにとつては何れほど苦しかつたらう。一寸彼は、

「あすこへ行つてはいけません……私ども、貴方がたに背いて敵に知らせました。」

といひたくなつてたまらなかつた。

併し大きい子供が

「もしお前が喋舌つたら已達は鐵砲で、打ち殺されるぞ。」

と云つてゐた。

恐れは子供を捕へて言はせなかつた。

クウルヌーブで、二人は空屋へ這入つて金を分けた。分配は正直に行はれ、ブルーズの下に澤山の金が鳴るのを聞き、彼は是れからやらうとするがロシユの遊びに思ひ耽けつてゐたといふことは、「眞實」が私に言はせる所であつた。子供のステンヌは自分の罪をそれほど恐ろしいとは、もう思はなかつた。

併し彼が一人ぼつちになると不幸な子供であつた……戸の後で大きい子供がステンヌを見捨てると、ステンヌの隠袋が大層重くなりだした。彼の心を締めつけ

てゐた片手は、前よりも一層強く締め付けた。もう巴里は前と同じ様に見えなかつた。通りがりの人たちは、子供が何處からやつて来たか知つてゐるやうに、嚴重に子供を見つめた。獨探といふ言葉が轍の音の中にも、運河の沿岸で練習されてゐた太鼓の中にも聞えてゐた。

とうとう小さいステンヌは家に着いた。さうして父親がまだ歸らないのを知つてステンヌは大そう嬉しかつた。それから二階の部屋に上がつて、あんなに重かつた金を枕の下に隠した。

其晩ぐらゐ父親が快く、嬉しさうな様子をして歸つて来たことはなかつた。地方の便りを受けとつたばかりであつた。國情が宜かつた。昔の兵卒であつた父親は夢中で喰べながら、壁にかゝつた小銃を見て居た。さうして彼は、

「坊や、お前が大きかつたら普西亞兵と戦ひに行く筈だ。」

とやさしく笑ひながら子供に言つた。

八時頃砲聲が聞えた。

「其れはオーベルヴキリエだ……ブウルジエで戦かつて居るのだ。」

と善く要塞を知つてゐた父親が子供に言つた。子供のステレヌは青くなつた。

さうして大變身體が、くたびれたのを口實にして寢床に這入つた。併し彼は眠られなかつた。彼はプロシヤ軍を襲撃する爲に夜中に到着した佛國壯兵隊が敵の伏兵に陥つたことを思ひ浮べた。彼は快く笑つて呉れた老軍曹を思ひ出して雪の中に倒れた姿を思ひ浮べた。又た其の老軍曹といつしよに倒れた澤山の兵卒が眼に付いた……かゝるすべての血の價は子供の枕の下にかくれて居るのだ。其れは昔の兵卒であつたステンヌの息子なのであつた。涙は子供の息をつまらせた。隣室では父親が歩いて行つて窓を明ける音が聞えた。下では廣場の邊りに非常喇叭が響いて、別働隊の一大隊が繰り出すのに點呼されて居た。確かにほんとの戦だ。可哀さうに子供は啜泣を堪らへる事が出来なかつた。

「どうしたのだ」

と父親が這入つて来た。

子供はもう我慢が出来なかつた。さうして寢床から飛び出して父親の足許に身を投げ出した。子供が身體を動かしたので金が床の上に轉がつた。

「こりやどうしたのだ、盗んだのか。」

と父親は震へながら言つた。

すると子供は、彼がプロシヤ兵の陣營に行つて、した事を一息に話した。子供は話すに随つて、心の切なさが薄らいで來た氣がした。自分ながら悪いと思つて、白狀すると氣が鎮まつた……父親は恐ろしい顔をして耳を傾けてゐた。話がすむと父親は兩手に顔を埋めて泣いた。

「阿父さん。阿父さん……」

と子供は言ひたかつた。

年老いた父親は答へもせず子供を排けて金を拾つた。

「これですつかりか」

と父親が訊いた。

子供はこれですつかりだといふ合圖をした。

年老つた父親は小銃と彈藥函をとつた、さうして金を隱袋に入れながら、

「よし、己が返してやる。」

といつた。

さうして彼は一言も言ひ添へず、振り向きもしないで下へ降りて別働隊に加はつた。別働隊は夜中に出發しようとして居た。

其の後、二度と父親の姿を見かけなかつた。

母 (包圍の追懐)

其の朝、私は友だちのB……といふ畫家に逢はうと思つて、ウアレリアン山に往つた。此の畫家はセート別働隊の中尉であつた。丁度彼は、護衛兵の中に居た。彼は場所をかへることが出来ない。巴里と、戦争と、出發した人の話をしながら要塞の祕密門の前で、丁度監視の水兵のやうに、動哨して居なければならなかつた。別働隊の服を着けた、昔からいつも勇ましい畫家であつた知合の中尉が、俄かに監視を止めて、立ち止まり、私の腕を取りながら、

「ヤー、好男子のドリーミがやつてきた……」

と小声でいつた。

すぐさま獵犬の眼のやうに輝いた。灰色の、小さい目で横目を用つかひながら、二つの尊ひ影を私に示して呉れた。其の影は今し方、ヴァイレリアン山の高地から現れたのであつた。

立派なドーシエとは本當のことであつた。栗色の長い禮服に木の古い苔のやうな青つばい天鵞絨の襟を附けた、小柄な赤い顔をして、平額で、圓い目の、木兎の嘴のやうな鼻つきの男だ。その様子はかうであつた。彼は花羅紗を被ぶせた籠を持つて居て、其の籠からは一本の瓶の首が出てゐた。片方の腕には罐詰の籠を抱へてゐた。其罐詰の箱は、巴里人が五ヶ月の包圍のことを考へずには見る事が出来ないものであつた。……

女トウウシエの家内に就いては、最初に大きな帽子と、貧乏をよく現はすやうに、上から下へ狭苦しく身體を締め付けてゐた肩掛が、目についたばかりであつた。其れから時々、外套が色ざめた縁の間に、尖かつた鼻の先と、灰色をした、憐れな髪の毛が見えた。

高地に達するとドーシエは立止まつて、息をつき、額の汗を拭いた。併し美しい十一月の霧中きりかきで高い所に居れば、さほど熱くはなかつた。併し二人は大急ぎで来たのであつた。……

女の方は立ち止まらなかつた。彼女は祕密門のどこまで眞直に歩いて来て、私どもに話しかけたいやうに、一寸ためらひながら私たちを見つめた。併し、疑もなく士官の金線に心が臆して彼女は哨兵に話しかける方が好いんだのであつた。彼女は第三聯隊の第六中隊に居る巴里別働隊の一員であつた息子に逢はせて下さいと哨兵に、びく／＼しながら頼んでゐる聲を聞いた。

「其處に居らつしやい。只今呼ばせますから」と哨兵がいつた。

ほつと溜息をつきながら、彼女は良人の方に振り向いた。二人とも、土手の縁に行つて、少しはなれて坐はつた。

二人はそこで暫く待つて居た。ヴァレリアン山は、大そう大きくつて、道路と、

丘陵と、稜堡と、兵營と、穹窿とで、複雑ごちゃ／＼してゐた。そんなら空と地の間にかゝつて、ラピウタの島のやうに、雲の最中に螺旋狀をして浮かんだ、解りにくい町へ往つて、第六別働隊の一兵卒を捜がしに行き給へ。今や要塞は、太鼓と喇叭と、駛驅する兵卒と、音を立てる水筒とに満ちてゐたことを考へずに何事だ。人は哨兵と交代するのだ。軍夫や、給養や、佛國壯兵隊が銃底尾で打ちながらつれて来た、血だらけの軍事探偵や、司令官に不平を訴へに來たナンテールの百姓共や、馬を飛ばして來た急使など往來してゐた。

肥えた人間や、汗をたらした獸や、馬腹に下がつて病氣の少年のやうに靜かに呻く負傷者を前衛隊からつれて來た側面椅子や、笛の音と「ヒツサ、ホー」の掛聲に新しい船を曳く水兵や、棹を手にして赤い洋袴を着けた牧人が狩だしてくる砲臺の獸類や、釣革付きの銃などが行つたり來たりして庭園に入り交り、東洋の隊商小舎の門の下のやうに、祕密門の下に落ち込んで居た。

「私の息子を忘れないでゐて呉れ、ばい、が……」

と其の間に、憐れな母親の目が云つて居た。五分間毎に彼女は、立ち上がつて
 そうつと入口に近付いた。さうして城壁のかげに身體をよけながら、前庭に、ち
 らと目を注いだ。併し自分の子供を嘲弄されることがあるといけないから、彼女
 はもう尋ねる勇氣がなかつた。

父親の方は母よりも臆病で、片隅から動き出す事も出来なかつた。母親が、が
 っかりした様子をしながら、悲しげに、歸つて坐はる度毎に、我慢が出来ないこ
 とを責めて、馬鹿者が人に理解させたいと言ふ風な身振をしながら、勤務の必要
 なことについて種々、説明してゐた。

諸君が往來を歩いてゐながら、ふと立ちどまつて眼を町の默劇の静かな、親し
 い小さな場合が何時も見たかつた。また默劇といふものは、たつた一の身振で、
 心内の全生活を我々に見せて呉れるものであるが、今、親子對面の場合に見るよ
 りも一々想像が出来るものなのである。併し、此の場合、殊に私の心を牽いたの
 は、默劇の人物である父親と母親の不器用で、魯直のことであつた。私はセラフ

アインの二人の役者の心のやうに、朗かな、感情に富んだ二人の默劇を透して、
 尊敬すべき家庭劇の變化を見續けてゐると、感動してしまつた。

ある晴れた日、この母親が、

「トロツシュさんも嫌だし、その哨兵も嫌らひさ。私は三月このかた息子
 の顔を見たことがない……私は出かけて行つて、抱きしめたい。」
 と獨言をいつてゐたのを聞いたことがあつた。

臆病で、生活に困つたことのある父親は、認可證を得るために種々な手数をや
 らなければならぬことを考へると、恐ろしくなつて、先づ母親を説服しやうと
 試みた。

「お前は考へないのかい。このヴァレリアン山は、嶮はしくつて大變だ……
 ……車もなくつて其處へ行くにはどうする積りで。その上、此の山は、要塞
 だ。女には這入れない。」
 「私は這入りますよ」

と母親が言つた。さうして良人は、彼女の望み通りにしてやるといふので歩き出した。彼は恐はいで冷汗をかき、寒さに凍えながら、至る處、戸につき當つたり、戸を間違へたり、一軒の役所で二三時間も手間取りながら、警戒線や、役所や、參謀の所や、主計官の處へ行つた。併し認可證を呉れるのは、そんな人ではなかつた。とうとう夕方司令官の認可證を隠袋に入れて、歸つて來た、……翌る日、寒いのに、ランプの光りで早く起き上がった。良人は、身體を温める爲めに、パンの皮を懷はした。併し妻の方はお腹がすいてゐなかつた。彼女はあすこで、息子と朝食がとりたかつた。さうして早速、今は可哀さうに別働隊の一員となつた息子を御馳走したいので、チョコレートや、菓子や、隠して置いた葡萄酒など、なくなつた時に、大切にとつて置いたサフランの箱までみんな籠に入れた。さうして父親と母親は二人そろつて出かけた。二人が要塞についた時に、人が來て戸を開けて呉れた。母親は恐かつた……いや、調べがすんだらしかつた。

「通すがいゝ」

と當直副官が言つた。すると彼女はやつと息をついて、

「この士官は丁寧な方だ」

と思つて。彼女は、鷓鴣の子のやうに、しづく／＼歩いてから急いだ。父親はやつと追つかけた。

「お前は、大そう早く歩くね。」

と云ひかけた。

けれども母親は耳にも入れなかつた。空を仰ぐと、地平線の霧の中で、ヴァレリアン山が、

「早くおいで……息子は此處に居るよ。」

と母親に合圖をして呉れた。

さうして今、到着して見ると、それは新らしい苦しみであつた。

もし息子を見附けることが出来なかつたら……もう歸らないなら……

俄に母親が、年をとつた其人の腕を打つて、一と飛びに立ち上がったのが私の目に附いた。彼女は、遠くから祕密門の弓形の下で、息子の足音を聞き分けたのであつた。

それは息子であつた。

息子が要塞から現れると要塞の正面が輝いた。

それは春中に背囊を背負ひ手に銃をとつて、反身になつた、大柄な、美しい青年であつた……

青年は嬉し相な顔をして、両親の傍に近づき男らしい、嬉しげな聲で、

「阿母さん、今日は……」

と云つた。すぐさま背囊や、外套も、鐵砲も、皆んな、母親の大きい帽子のかけにかくれた。次には父親の番であつたが、長くはかゝらなかつた。大きい帽子を被ぶつた母親は、其人の代りに、いろんなことを望んだ。母親は飽くことを知らなかつた。

「丈夫かい。着物を澤山着て居るかい……何處にお前の着物があるのかい」

外套の飾り下に、情愛の籠つた、長い眼ざしを私は感じた。その目付きで母親は、接吻と、涙と、微笑の雨の中に、息子の頭から足先までくるんだ。それは母親の愛情の三ヶ月間の滞りで、一時に息子へ拂つたのであつた。父親も大へん感動した。けれども其の風に見せなくなかつた。さうして彼は我々が見て居ることを知つて居て、

「許して下さい……女ですから……」

といふ風に側目で我々の方を見て居た。

私は本當に許してやつた。……

喇叭の音が俄かに、此の美しい歡喜の上に鳴りだした。

「呼んで居ります、お別れいたさなければなりません。」
と息子が云つた。

「なに、私たちと一緒に朝食を喰べないのかい。」
 「いゝえ、どういたしまして……そんなことは私には出来ません……私は砲臺の上で二十四時間、番をしなければなりません。」
 「あゝ」

と憐れな母親は云つた。彼女はそれより以上、いふことは出来なかつた。両親と悴は、がっかりした様子をしながら、ちよいと顔を見合せながら残つてゐた。すると父親が、斯う云ひ出した。

「せめて此の箱を持つておいで」

と、やつと思の叶つた、可笑しげな、悲しい顔付をして、金切聲でいつた、併し別れの悲しみと、感激にかられては、もう厭やな箱が目に入らなかつた。温い手が震へながらほかの手をさがしたり、動いたりするのを見るのは悲しいことであつた。さうして此の小さな箱に、大した悲痛を交へても、恥かしく思はず、

「箱は何處に在りまして、……」

と涙に掻きくれた聲を聞くのは哀れなことであつた……箱は又見つかつた。又最後の、長い抱擁があつた。さうして息子は駈けながら要塞へ歸つて行つた。

両親がこの朝食の爲めに遠くからやつて來たことを考へ給へ。二人が其の爲めに大噪ぎをして、母親は夜中眠らなかつたことを考へ給へ。さうしてもし諸君が、此の間に合はない御馳走より、もつと悲しいことを知つて居るなら私に言ひ給へ。

両親は同じ場所に凝つとして、目はいつも要塞の秘密門に注ぎながら、なほ暫く待つて居た。その秘密門から息子は見えなくなつたのであつた。とう／＼父親は體を動かして半ば振り向いた。さうして勢よく二三度咳をした。彼の聲は確かりはして居た。

「さあ、行かう。」

と父親は大そう陽氣に大聲でいつた。それで父親は私達に大層、恭しく挨拶をして、妻の手をとつた……私は道の曲り角まで見送つてやつた。父親は癪にさは

つた風をしてゐた。彼は落膽おちかみした身ぶりみぶりで籠を動かした……母親は前より落ちついでゐるらしかった。首垂くたれながら腕を身體にもたせながら側わきを歩いて行つた。併し、ときどき、せまい肩の上で、肩掛けが、びく／＼動くのを見たとき私は思つてゐた。

伯林包圍

私達は爆裂弾で孔を穿がたれた城壁や、機關砲で壊された人道に、巴里包圍の歴史を尋ねながら國手のく……とシャン・ゼリゼーの並木道を上がつて居た。其の時、エトワルの廣小路につく少し前に、國手は立ち止まつて、凱旋門の周りにあれほど壯麗に集つた、片隅の大きい家並の一つを私に示しながら、

「ねえ君、露臺の上に閉つたあの四つの窓が見えるだらう。去年の八月は嵐と、災難とで蒸し暑くつて我慢が出来なかつたが、其の月の下旬に私は恐ろしい中氣患者の往診に呼ばれた。それはジュウーブ大佐の家であつた。病人は第一期帝國の装甲兵であつた。此の病人は光榮と愛國心に驅ら

れた老兵で、戦争の始めからシユアン・ゼリゼーに来て露臺附の一室に住んで居た……どういふ譯か想像し給へ。我軍の凱旋を見物しようとする爲めだ……可哀さうな年寄さ。彼が食卓を離れた時に、ウキスサンブルの戦報が到着した。彼は敗戦公報の下部にナポレオンの名を讀むと、雷にでも撃たれたやうに倒れてしまつたのだ。

私は此の病人が丁度、頭の上に、棍棒で一撃うけたやうに、血だらけな生氣のない顔をしながら、部屋の敷物の上に、大の字なりに臥て居るのを見た。立ち上がれば、身長が大へん高いに違ひない。寢て居ても、すばらしく大きい様子をして居た。美しい顔立——、大そう綺麗な齒並、すつかり縮れた髪の毛、八十歳といふのであつたが六十歳に見えた。其の側には孫娘が跪いて、涙に暮れて居た。孫娘は大佐に似て居た。二人並んで居るのを見ると、同じ型に打ち込んだ二つの美しい希臘のメダルともいへよう。唯だ古い方が土け色をしてゐて周りが減つて居た。片方は型が新しいせゐ

で、滑らかに、光澤を帯び、はつきりとして美しくかつた。

此の子供の悲しみは私を感動させた。彼女は武士の孫娘でもあつたし、娘でもあつた。娘はマツクマホンの參謀を父としてゐた。此の彼女の前に横はつて居た大きい老兵の面影が、彼女の心に同じやうな恐ろしい父親の面影を喚び起した。私は出来るだけ彼女を安心させた。併し實は殆んど希望を持つて居なかつた。我々は綺麗な、立派な半身不隨の病人に係り合つてゐた。八十歳では癒るのも覺束ない。ほんとに三日間、病人は不隨と、人事不省の同じ容態を續けてゐた。……この容態がよくも悪くもない時にライスシヨフエンの戦報が巴里についた。君は本當に可笑しな工合で、こんな戦報がきたが覺えて居やう。夕方まで我々は、皆んな大勝利だと信じて居た。二萬四千のプロシヤ兵が殺されて、親王殿下が虜になつたといふことであつた……如何なる奇蹟と、電流の力で、この國民的歡喜の反響が、聾で、啞の病人を捕へてその中氣の不隨状態にまで、這入り込んで行つたか

解らなかつた。其晩私は床に近づくともう前と同じ病人を見る事が出来なかつた。目は殆んどはつきりして、舌は前ほど重くない。彼は私を見て微笑する丈の力と、二度吃りながら、

「大勝利」

と云ふだけの力を何時も持つて居た。

「さうです。大佐殿、大勝利です。」

私がマックマホンの大成功を事細かに話すにつれて、彼の顔付が緩んで、顔いろも明るくなつてきた。

私が出ると孫娘は、青い顔をしながら門の前に立つて居た。彼女は啜泣をして居た。私は、

「でも祖父さんは助かつたよ。」

と手を取りながら言つてやつた。

可哀さうに娘は私に答へる勇氣は殆んどなかつた。今しがたライスシヨ

フエンの眞報が揭示されたばかりであつた。マックマホンは敗れて、軍隊が全滅した……私達は、がっかりして顔を見合せた。彼女は戦場にある父のことを考へて悲しんで居た。私も老病人のことを考へて身を震はしてゐた。病人は、きつと此の新らしい感動には手向ふことが出来まい……といつて、どうしようか……病人を蘇よみがへらせた喜びと、虚報を其まゝにして置かう……けれども、そんなら、嘘を吐かなければならない、

「そんなら私が嘘を吐きませう。」

と氣丈な娘が涙を拭きながら言つた。

彼女は大そう晴やかな様子をして御祖父さんの病室に這入つて行つた。

彼女の病室でやつたのは苦しい仕事であつた。最初の中は旨くいつた。病人は頭がわるくつて子供のやうにだまされて居た。併し健康が回復するにつれて考がはつきりして來た。病人に軍隊の運動を知らせて戦報を取り次いでやらなければならなかつた。夜晝よるひる、この娘が獨逸の地圖の上に、こ

ゞみながら地圖に小旗をさして伯林附近にハセーン軍や、ヴァンエール邊にフロワツサール軍や、バルチック邊にマツクマホン軍を置いて榮譽赫赫たる戦線を組立てようと勉めゐるのを見るのは、ほんとに、可哀さうなことであつた。それについて彼女は私に意見を求めた。私は出来るだけ助けてやつた。併し、この空想的の佛軍侵入に對して、我々の役に立つたのは特に御祖父さんであつた。彼は第一帝國の際、幾度も獨逸を征服したのであつた。彼は前から敵軍の攻撃をすつかり知つて居た。

「さあ敵軍の來ようとする道は此處だ、そら我々のすることはかうだ……」
 と言つて居た。さうして彼の豫言はいつも實現された。それはいつも病人を大さう自慢させずには置かなかつた。

不幸にも我々が諸所の都を取つても、戦勝を得ても、甲斐がない。我々は彼の思ふほど、早く行くことが出来なかつた。此の老人は飽きたらなかつた。毎日私が來ると新らしい戦報を教はつた。

「先生、私どもはマイアンスをとりました。」

と若い娘が傷ましい微笑を含みながら私の前に來て言つた。戸越しに嬉しさうな聲が、

「進むな、進むな、……一週間たてば伯林に侵入しやう……」
 と私に向つて叫ぶのが聞えた。

此時プロシヤ兵は一週間で巴里に迫まらうとした……我々は此の病人を田舎に移す方が好いかと考へて居た。併し、外へ出ると。すぐ佛蘭西の狀態がすつかり病人に知れやう。私は病人がこの真相を知つて、大そう感動するには、餘り衰弱してゐると思つた。其れ故、残して置くことにきめた。

「最初、包圍された時に、私は病人の家に行つた——私はよく覺えて居る。すつかり閉まつた巴里の城門と城壁下の戦争とが我々皆んなの心に與へる悲みを抱いて私は大變、感動して居た。外郭は國境になつてしまつた。私は病人の所へ行くと病人は、寢床の上に坐つて大さう嬉しげに、自慢らし

く、
「どうだい、君、伯林包圍が始まったぢやないか。」
と言った。

私はぼんやりして病人を見つめた。

「なに、御存じですか……」

孫娘は私の方を向いた。

「あゝ、さうです……大した戦報ですわ……伯林の包圍が始まりました。」
彼女は落ちついた可哀らしい様子をして一寸縫針を抜きながらかういつた。どうしてそんな事を氣取^{けど}らうか。病人は要塞砲の音を聞くことが出来な
い。この、不吉な、蹂躪された、不幸な巴里を見ることは出来なかつた。
彼の病床から見たのは、凱旋門の八角塔であつた。彼の室の中では、彼の
空想を続けるのに適はしい第一帝國の骨董品が彼の周りを取巻いて居た。
元帥の肖像、戦争畫、バビの服を着た羅馬王、戦利品の革で飾つた大へ

ん醜^{みにく}い、大きな帝國の紀念品を支へた「もちをくり」、メダル、黄銅、地下
のセントヘレナの岩、黄い着物をきて舞踏會の服をつけた。廣袖を着けた
目の涼しい、髪かみの縮れた黄い服装の同夫人を現はす微細な畫像が病人を取
り巻いてゐた。何もかも、羅馬の王様、元帥、身長が高く、帯も高い、黄
い服装の夫人達、一千八百〇六年の光榮であつた、かゝる古めかしいもの
が病人を取り巻いて居た……好漢、大佐よ、この病人をして、かくも單純
に伯林の攻圍を信ぜさせたのは、我々が言ひ聞かせてやつた總ての事より
も、この勝利と征服の空氣であつた。

此の日から我々の軍事的行動は大へん簡單になつた。伯林を取ることは
忍耐の問題に過ぎない。時々病人が退屈すると息子の手紙を読んで聞かし
た。勿論其の手紙は虚うその手紙であつた。なぜと言へば何物も巴里に這入ら
なかつたし、セダンの役からはマクマホンの幕僚であつた大佐の子息は、
獨逸砲臺の方へ護送されてしまつたからであつた。諸君は父親の便りを手

にしない此の憐れな娘の絶望を想像するであらう。父親は捕虜になつて、萬事不自由勝で、多分病氣だらうと娘は知つて居た。さうして彼女はいつも征服した國に進み行く戦線の一兵卒が書けるやうな短い手紙をかい、歡ばしい父の噂をしなければならなかつた。時には氣力のないこともあつた。幾週間も手紙を読みきかせなかつた。御祖父さんは大へん心配して、もう眠らなかつた。すると早く獨逸から手紙が着いた。彼女は涙を湛へながら御祖父さんの病床の側で陽氣にそれを讀まなければならなかつた。病人はつゝましくそれを聞いて如何にも悟りがほに笑つて賛成したり、批難して、稍や曖昧な文句を説明してゐた。併し、特に病人の立派な精神は息子に送つた返事の中に現れて居た。其の手紙は、

「お前は佛蘭西人であることを決して忘るな。憐れな敵に對しては寛大なれ。あんまり、慘酷な侵入をやるな……」

と手紙にかいてあつた。それは長々しい勸告で他人の財産に對する尊敬と

婦人に負ふべき禮儀に對する立派な意見であつた。征服者の守るべき名譽ある光榮の眞の寶典であつた。又、政事に關する一般の意見と敗者に課すべき講和の條件も交へた。それについては此の病人は決して強慾でないといはなければならぬ。

「戦争の償金……それきりさ。國を取つたりして何の役に立つか。獨逸を佛蘭西にすることが出来ようか。」と病人は確りした聲で云ひながら書き取らした。人々は彼の言葉を聞くと感激せずに居られなかつた程、彼の言葉の中に誠實と、愛國的の信念があつた。

其の中に巴里の包圍はいつも進んでいった。あゝ、それは伯林の包圍ではなかつた。それは大寒と、砲撃と、流行病と、饑饉の時であつた。併し私達の注意と、努力と病人の廻りに募る愛情の御蔭で、病人の冷靜なことは、ちつとも阻害されなかつた。終りまで私は病人に白パンと、新しい肉を與へることが出来た。併し病人にばかり肉とパンがあるばかりであつ

た。諸君よ、これほど、罪のない自分勝手な御祖父さんの食事よりもつと悲しいものを想像することが出来ない。病人は晴れやかな笑顔をして、胸にセルビエツトをかけて床の上に坐つてゐた。孫娘は不自由勝のせゐで體も青ざめながら御祖父さんの手を取つて、飲ませたり、又は禁ぜられた旨しい物を何んでも喰べさせて上げた。すると病人は、温かい室の快よさに、食事から元氣附いて北歐の戦役を思ひ出した。外には冬の風が吹いて雪が窓際で渦巻いて居た。病人は唯だ凍つたビスケットと馬の肉を食べて居た露西亞に於ける不吉な退却を復もや繰かへした。

「お前は解かつたらう。私たちは馬の肉を食べて居たのだ。」

私はこの娘にはよく解かつたと思ふ、彼女は二月以來馬の肉より外の物を食べて居なかつた。併しだんく回復期が近づくに従つて、病人の周りで、私達の彼目は一そう、骨が折れた。感官と四肢の不隨は、これくで私達の役に立つて居たが、もう癒り始めた。もう二三度獵犬のやうに耳

を聳てゐると、凱旋門の恐ろしい一齊射撃が病人を飛び起したこともあつた。私達は伯林で、バセーン將軍が勝つた所だと嘘を吐かなければならなかつた。癡病院で勝利の祝砲を打つたのだと偽はらなければならなかつた。ある日、病床を窓際まで押してやつた。——その日はビーサンヴァアルの木曜日だと思ふ——病人にはクランド・アルメの並木通りに集つた國民軍が克く目に這入つた。

「あの隊は何んだ」

それから病人が齒ぎりをしながら、

「姿勢が悪い、姿勢が悪い……」

と呟くのが私達の耳に這入つた。

彼は其れだけ言つた。併し、これから後は、手篤く注意しなければならなと思つた。不幸にも、十分、用心することが出来なかつた。

ある晩、あの娘が、どぎもぎしながら、私の所へやつてきて、

「あした、プロシヤ兵が這入つて参ります。」
と言つた。

病人の部屋は開いてゐたのか。實際、後になつて考へると、その晩に限ぎつて病人が、變な顔付をして居たのを思ひだす。病人は私達の言葉を聞いたのだらう。唯だ私達はプロシヤ兵の話をしてゐたのであつた。併し病人は、佛蘭西兵のことだと思つて、自分が長らく待ちぬいてゐた凱旋だと考へてゐた——花飾と軍樂隊に送られてマツクマホン將軍が息子をそばに從へながら、並木道を降りてゆくと、この老病人はルツセンの時のやうに、大禮装を着けて露臺に出て、穴のあいた軍旗と、火藥で黒くなつた鷲章に敬禮をする凱旋式と取り違へてゐた。

憐れなシュエヴ大佐さ。餘り烈しく感動するのを避けようとして、我が軍隊の分列式を見せまいと病人は想像したのに違ひない、それ故病人は、わざと誰れにも談さなかつた。けれども翌朝、プロシヤ軍が、マイヨール門

からチュルリに續く長い道路に、怖はく這入つた來た時に、病室の露臺の窓が、そうつと開いた。昔は大佐であつた病人が、軍服や大きい軍刀、ジオーの古代裝甲兵の光榮である古服をつけて、露臺に姿を見せたのであつた。如何なる意志の努力と、生命の躍動が此の病人を立ち上らしたか今は今だに怪しく思つてゐる。さうして最も確實なことは斯ういふことであつた。病、あれほど廣い、靜かな、道路と、家の閉まつた窓など、何處にも變んな赤十旗と、我が凱旋兵を迎へに行く人さへない、大きいラザレのやうに陰氣な、里を見て驚きながら、手摺の後に立つてゐたことであつた。

すぐさま病人は思ひ違ひをしたと信ずることが出來た。

いや、彼方あそこの凱旋門のかげでは、がやん／＼する騒ぎであつた。曙の日向を進んで行く黒い一列であつた。……それから、だん／＼軍帽の尖針が、輝いて、イエナの小さい大鼓が、鳴り出した。

さうして凱旋門の下では、中隊の重い足音と、軍刀の突きあたる音とに、調子ついたシュベル將軍の戰勝行進曲が、響きだした。

すると廣場の、淋しい、陰氣な、靜寂のさなかに、

「戦へ、戦へ、……プロシヤ兵だ……」

といふ、怖ろしい叫び聲が聞えた。さうして前衛のプロシヤ槍騎兵は、高い露臺の上で、立派な老人が、腕を動しながら、よろめいて、ばたりと倒れるのを見かけたのであつた。

こんどこそ老病人のジューブ大佐は、まったく死んでしまった。

不良守備兵

サント・マリイ・オー・ミーヌに住んでゐた大鍛冶屋のロリイは、その晩に限つて面白くなかつた。いつもは鍛冶竈が消えて日が暮れると直ぐ門前の椅子に坐つてゐた。それは仕事と熱い日の苦し味から生じた快い疲れを味ふためであつた。さうして職人達を歸さないうちに、工場の退けるのを眺めながら、職人と一緒に冷めたい麥酒を、二三杯ぐつと飲むのが常であつた。

けれども其夕方に限ぎつて、彼は食卓に就く時まで、仕事場に残つてゐた。そのうへ、嫌やく／＼食卓にやつてきた。

年を取つた御内儀おかみさんは、彼の様子を見ながら、

「どうしたのだらう……私に言ひたくないやうな悪い通知を聯隊から、受け取つたのか知らん……惣領は病氣かも知れない」と考へてゐた。

けれども御内儀おかみさんは尋ねる勇氣がなかつた。さうして唯だ、焦麥穂色こほむぎいろの髪をした三人の子供を黙まらしてゐた。この子供達は、黒大根の美味おいしいサラダにクリームをかけたのを、ぼりく／＼喰べながら、卓布の廻はりて笑つてゐた。

御仕舞に亭主のロリイは、怒つて卑を押しだした。

「あゝ、馬鹿野郎め……畜生ツ」

「誰が御氣に入らないのです。」

すると鍛冶屋のロリイが怒鳴だした。

「俺おいらや彼奴等あいつら五六人が癩かに障はるのだ。彼奴等あいつらは佛蘭西兵の軍服を着け、ヴアピエル人と手を組みながら、今朝から町を、ぶら／＼歩いてゐやがる……彼奴等は——何んと言ふか知らないが、——プロシヤの國籍を選んだ

仲間だ。さうして俺達は毎日々々、こんな似せアルサス人の歸國を見てゐるのだ。……いつたい彼奴等に何を飲ませやがつたのか。」と彼は言つた。

すると御内儀さんは辯護をやつてみた。

「でも、御前さん、あの子供達の罪ばかりとは限りませんよ。……あの子供を送つてやるアフリカのアルシエクは遠いんですもの……彼處へ往けば子供達は、國が戀しくなります。それに歸のてきて、もう兵隊は嫌やだと言ふ悪い心が、大へん強いんですもの……」

是を聞いたロリイは食卓を、拳で一打、強く敲いて、

「お黙まり……お前達、女なんか、何にも解るものか。御前は、いつも子供と一緒に暮らして、子供のためにばかり生きてゐたから、子供の身長ほど心が狭くなつたのだ。……で、俺れなんか……彼奴等は馬鹿野郎で、謀叛人だ、卑劣者の中の卑劣者だ。俺りや、お前に斯う言つてやる……も

し運悪く、家のクリスチャンが、私がシコルヂユ・ロリイと言つて、佛蘭西の輕騎兵にも何年仕へてゐたことが、本當のやうに、實際、こんな不名誉なことをやるなら、俺りや、俺の軍刀で、身體を滅多斬にしてやると、お前に言つておくよ。」

と言つた。

彼は物凄い様子をして、半身を起し、息子の寫眞の上の方で、壁の上に懸つてゐた輕騎兵の長い軍刀を示した。息子の寫眞はアフリカで取つた守備兵の寫眞であつた。けれども、鮮かな色が、激しい光線をうけて白くなり、きら／＼して霞んで、眞黒になつたり、日影をうけたりしてゐた息子の正直な寫眞顔を見るとすぐ怒りが静まつた。さうして彼は笑ひだした。

「戦争中には、あんなにプロシヤ人を殺したクリスチャンが、プロシヤ人になるかと思つて、怒つたのは、俺れ、よつほど馬鹿だ……」

斯う考へて、機嫌が直ると、ロリイは、陽氣に食事を終つてしまつた。それか

ら直ぐ、ヴィル・ド・ストラ プールといふ茶屋へ麥酒を飲みに出かけた。

もう今、御内儀さんのロソイは獨りぼつちになつた。彼女は三人の子供を寝かしてやつた。まるで鳥の巢が寝るやうに、子供達が隣りの部屋で囁つてゐるのが耳に這入つてゐた。寝かした後で彼女は、庭近くの戸の前で、仕事物を手にして繕ひはじめた。とき／＼彼女は溜息を吐いて、考へた。

「あゝ、さうだ。そんなことが無ければ好いが……あの人は卑劣者だ。」

謀反人さ。でも仕方がない。阿母さんたちか、逢つて、大歡びだらう。」

軍隊に這入らないうちには、息子が、小さい庭の手入をしてゐた今と同じ時分を、彼女は思ひ出した。それから井戸を見詰めしめた。その井戸には、髯を長く伸ばし、アルースを着た、如露に水を入れてきたのであつた。息子は髯を長く伸ばし、フルーズを着て、美しい髯は、彼がアフリカの守備隊に這入る時に、切つてしまつたのであつた。

俄かに彼女は身を震はした。畑に向つてゐた奥の戸が開いた。犬は吠えなかつ

た。併し今し方、這入つてきた男は、盗人のやうに、石塀に沿ひながら、蜂の巢の間に滑り込んできた。

「阿母さん。今日は……」

家の可愛いクリスチャンが、恥かしげに、もぢくしながら、軍服も、だらしなくはだけて、前に立つてゐた。舌さへ重苦しく硬ばつてゐた。

息子は、仲間と一緒に歸國したのであつた。一時間前から彼は家の廻りを歩き廻はつて、父親が出かけたら、家へ這入らうとしてゐた。

母親は彼を叱りつけようと思つたが、さうする勇氣が無かつた。彼を抱きしめてやらないのも久しい事であつた。彼はアフリカが嫌やになり、家の人達を遠く離れて住むのが厭やで、そのせゐで規律が苦しくなり、また彼がアルサスの口調なので、友達が彼をプロシヤ人と呼ふといふやうな好い理由を述べた。息子の言葉を信ずるのは、其顔を見てゐさへすれば好かつた。息子の言つた事は、何でも母親は信じてしまつた。しつきりなく話しながら、母親と息子は階下の部屋に這

入つた。弟達は、目を覺まして、寢衣で素足のまゝ、兄さんを抱きしめに来た。母親は喰べさせてやりたいと思つたが、彼はお腹が空いてゐなかつた。唯だ喉が乾いてゐた。何時も、さうであつた。彼は朝から居酒屋で金を拂つた麥酒や、白葡萄酒以上に、ぐつと水を飲んだ。

けれども誰れか、中庭を歩いてゐた。それは父親が歸つて來たのであつた。

「リリスチャンや、阿父さんが入らした。早くお隠くれ、阿父さんに申

し上げて譯を話す時間があるから……」

母親は息子を大い瀬戸物のストローヴのかげに、押しかくした。それから手を震はしなから、編物をしてゐた。運悪く守備兵の軍帽が、机の上に残つてゐた。ロリイが這入つてきて最初、目をつけたのは此であつた。母親の青い顔、その困つた様子……父親は、すっかり悟つてしまつた。

「クリスチャンが茲にゐるぞ……」

父親は物凄く聲でいつた。さうして氣狂のやうな身振をして、洋刀を取ると、

クリスチャンの身を縮めてゐた煖爐の方へ駈けつけた。

クリスチャンは倒れるといけないから、壁に寄り掛つて、もう酔ひは醒めて、青ざめてゐた。

母親は二人のなかに駈け込んだ。

「お前さん、お前さん、殺してはいけません。仕事場で御用があるから、歸つて来いと手紙をだしたのは、この私ですよ……」

母親は啜泣きながら、父親の腕に縋りついて、身を曳摺つてゐた。

暗い部屋の中で、何んだか薩張り解らないほど、ごちやく／＼して、怒りと、涙に充ちた是等の聲を聞いて、子供は泣いてゐた……

父親は、ぢつとして、妻を見ながら、

「あゝ、お前が呼んだのか……そんなら好し。彼を寢かしてやれ。明日、どうするか考へよう……」

と言つた。

翌る朝、クリスチャンは悪夢と、理由ない怖れに充ちた重苦しい睡から、覺めると、子供の部屋へいつた。花の咲いた蓬草が掛けわたして、鉛の縁を取つた小さい窓硝子越しに、太陽が高く昇つて、もう熱かつた。階下では鐵槌が鋼鐵盤の上に響いてゐた……

母親は枕許にゐた。彼女は夜つびで、枕許を離れなかつた。それほど亭主の怒りが怖はかつた。

父親は、戸棚を締めたり、あけたりしながら、また溜息をついたり、泣きながら、朝になるまで家中を歩いてゐた。彼も夜つびで寢なかつた。さうして今、息子の部屋へ這入つてきた。先に鐵のついた山越しの丈夫な杖を手にして、大い帽子を被り、高いゲートルを穿き、旅行に出てゐるやうな装束をして、鹿爪らしく這入つてきたのであつた。

彼は、づか／＼寢床の處へ進んで、

「さあ、起きろ……」

と言つた。

息子は、些し狼狽へた。守備兵の軍服が取りたかつた。

「いや、それぢやない……」

と父親が酷しく言つた。

母親は怖はく、

「でも、貴方、ほかの着物がありません」

と言つた。

「そんなら俺れのを着せてやれ……俺れは、もう入らない。」

息子が着物をつけてる間に、ロリーの父親は軍服と小さい襯衣と、大きな赤い洋袴を、丁寧に畳んでゐた。包みが出来ると、地圖を入れた鐵葉ふりきの箱を頸の廻りに掛けた。それから彼は、

「もう、階下へ往かう」

と言つた。三人とも無言の儘で仕事場へ降りた。輔ふいこが鳴つて、皆んな働いてゐ

た。息子はアフリカに居たとき、あんなに思ひ慕つてゐた、大い開け放した此の仕事場を見ると、子供の頃を思ひだした。彼は往來の熱さと、黒い鍛冶かぢくの中で、竈の眞赤な火花のなかで何して遊んだか思ひだした。愛情が湧きだして、父親の容しを得たくつて堪らなかつた。併し目を上げると、いつも酷しい眼付に出逢つた。

とうとう父親は話し出さうと心をきめた。

「茲こゝに鋼鐵かたしき盤と、道具もある……是れは皆んな御前のだ。……これもお前のだ……」

と小さい庭を指さしながら言つた。その庭は、日影と蜂に充ちて、煙つた戸の額かぶたから奥深く擴がつてゐた……

「蜂の巢も、この家も、皆んなお前のものだ。お前は此んなものに、お前の名譽を犠牲にしたから、お前は、せめて是を守るが好い。もう此こゝの家の主人だ。俺は明日、出發する……お前は、佛蘭西に五年の負債を脊負つてゐる……俺はお前のために、それを拂つてやりに行くのだ……」

「貴方は、何處へ入らしやるの……」
と年老いた母親が訊いた。

「阿父さん……」

と息子は頼んだ。併し父親は、振り向きもせず、大股に歩きながら、もう出かけてしまったのであった。……

セヂ・ベル・アベスの第三守備兵駐在所に、數日前から、五十五歳の志願兵が
みた。

巴里の農夫

シャンプロゼーで、百姓達は、大そう嬉しかつた。百姓達の養鶏場が、ちやうと私の窓下にあつた。半年の間といふものは、彼等の生活が稍、私の生活に交ちつてゐた。夜明けのずつと前に、亭主が既に這入つて、荷車に馬をつけ、マルベイクコに出かける音が聞えた。彼は其處に野菜を賣りに往くのであつた。すると其の男の妻君が起きて、子供に着物をきせて、牝牛の乳を絞つてゐた。

一日中、木の階子段で、素晴しく大い木履や、小さい木履の、がた／＼昇つたり、降つたりする音であつた。午過ぎになると、森としてしまった。

父親は畑に往つて、子供は學校に往つてゐた。母親は、赤坊を見張りながら、

中庭の戸口の前で洗濯物を伸ばしたり、縫物をしたりして、静かに働いてゐた。とき／＼誰か道を通つた。母親は針を運びながら話してゐた……

あるとき、それは八月の末であつた。いつも八月のことであつた。あの百姓の妻が、隣の女と話してゐるのが私の耳に這入つた。

「そんならプロシヤ兵が……佛蘭西ばかりに居るのですか。」

「シヤ、ラレにも居ますよ。ジャンの阿母さん。」

と私は愈越しに言つてやつた。

さういふと彼女を大そう笑つた。このセーデ・エ・オワズの小さい片隅では、百姓達がプロシヤ軍の侵入を信じてゐなかつた。

併し、毎日々々、荷物を一杯、積んだ車の通るのを見かけた。大い商家は閉まつてゐた。

日が大へん長い、この美しい月中、庭園は花盛りであつたが、閉つた鐵格子のかげでは、淋しく、陰氣であつた。

だん／＼、私の隣りに住んでゐた百姓達が怖れだしてきた。國に往く度毎に、彼等に悲しかつた。彼等は見棄られたやうに感じた。

併し、ある朝、村の四隅に太鼓の音が聞えた。村役場の命令だ。プロシヤ兵に何にも残して置かないために、巴里へ出かけて、牝牛や、芻秣を賣らなければならなかつた。それである亭主は巴里を指して出發した。それは悲しい旅であつた。

大道の舗石路には、豚や、車輪の間に挟まつて、びく／＼してゐる羊や、荷車のそばで鳴いてゐる、縛つた牛などの群と、入れ交ちつて、移轉ひうつしの重い車が、長い列を作つて續いていつた。堀際に沿うて、貧しい人達が、古い道具を一杯積んだ荷車や、色の醒めた安樂椅子や、帝國時代の卓子や、波斯畫布を飾つた鏡のかけに、歩いていつた。さうして斯かる埃を動かして、斯かる紀念品を移して、大道を山のやうに、引いてゆくのは、何にか災難が、棲居オマヒなかに這入込んだことを人は感じてゐた。

巴里の城門では、人いきれがしてゐた。二時間、待つてゐなければならなかつた。……その間に、憐れな亭主はその托手によりかゝりながら、砲口や、水の満ちた溝渠や、眼の前に坂をなしてゐた砲臺や、道傍に倒されて、花の咲いた長い伊太利柳を驚いて見詰めてゐた。夕方、彼は疲れて歸つてきた。さうして見てきたことを残らず妻に話した。妻は翌朝から怖はがつて逃げだしたかつた。けれども、出發は明日々々と何時も延ばされてゐた。彼がまだ耕したがつてゐたのは僅かな地面の、收穫であつた。葡萄酒を取り入れる時があるか、どうか解らなかつた。それからプロシヤ兵が多分、自分たちの土地を通るまいといふ當てにならない考へが、心のそこに潜んでゐた。

ある夜、百姓達は、怖しい出發の音で眼が醒めた。コルベイコ橋が飛去つた處であつた。到る處、男達が戸を叩きながら、

「逃げる、槍騎兵が來た、槍騎兵がきた」

と言ひながら歩いてゐた。

直ぐさま人は起き上つた。さうして荷車に馬をつけ、半分、睡つてゐた子供に着物を着けた。さうして數名の隣人と一緒に、横道から逃げだした。百姓達が坂を登り詰めてしまふと、三時の鐘がなつた。彼等は、最後の見納めに振り向いて見た。家畜に水を飲ませる池、教會の廣場、セーヌ河に降る道や、葡萄畑に續く道など、通ひ馴れた道が、もう見知らぬものゝやうに思はれた。白い朝霧のなかに、見棄てられた小さい村が、怖しい出來事を待ちながら震へてるやうに、ぎつくり家並を詰め合つてゐた。

もう今、百姓達は巴里へやつてきた。あうして淋しい町の五階の二部屋へ這入つた。あの亭主は、左ほど不幸ではなかつた。仕事を探してやつた。やがて彼は國民軍へ這入つた。彼は城塞を守り、練兵をして、自分の家の空^からつぼの納屋と、種子のない牧場を忘れるためには、出来るだけ茫んやりしてゐた。物の解らない妻は、悲しがり、嫌になつて、何うなることか、解らなかつた。妻は二人の惣領

娘を學校に入れてやつた。庭もない學校のなかで、娘達は、巢のやうに騒しく、陽氣な、美しい田舎の修道院を思ひ出し、それから修道院にゆくために、毎朝、森を過ぎて半里、歩かねばならなかつたことを思ひだすと、胸が込み上げてきた。母親は娘の悲しい様子を見るのが苦痛であつた。赤坊が、取りわけて氣にかつた。

故郷では、庭のなかでも、家のなかでも、子供は母親の後から蹤いてゐて、彼女と同じほど、闕の踏段を越えたり、洗濯鉢に赤い手を浸したり、母親が編物をして休んでゐると、戸のそばに坐はつて、往つたり、きたりしてゐた。

此處では五階まで登らなければならなかつた。足が蹶つまつ躓く暗い階子段、狭い暖爐に、けちな火、高い窓は灰色の雲と濡れた石盤屋根の地平線がある許りであつた。

赤坊の遊べる中庭があつた。併し門番は遊ばせたくなかつた。

門番と言ふものは町で拵へたものだ。田舎では自分が家の主人おごりであつた。各自片隅を持つてゐて、人手を借りずに、取り締りが附いてゐる。一日中、家が開け

放しだ。夜になると、大い木の錠をおろしておく。家といふものが、大そう豊かな田舎の暗い夜なかに、怖れもなく沈んでゐる。とき／＼犬が月に向つて吠えるが、誰れも構はない。

巴里では、貧乏人の家の中で、家の持主は門番である。子供は獨りで降りて往く氣になれない。それほど子供は、この門番女を怖はがつてゐた。この意地悪な女は、中庭の舗石の間に、石炭がらと糞を曳くからと言ひ立て、羊を賣らしたのであつた。

赤坊が倦きると、心を紛らさうとして、可哀相な母親は、もう何うして好いか解らなかつた。食事がすむと、母親は畑へでも往くやうに、子供をくるんで、町を歩き、遊歩場に降りて、手に抱へながら、ぶら／＼させてやつた。

子供は、ぎよつと、衝きあたると、やつと見廻はした。子供の心を牽くものは、馬ばかりであつた。さうして馬こそ子供が出逢つて、笑ふ唯つた一つのものであつた。母親も、何物にも興味を帯びなかつた。彼女は、故郷の家や、財産のことを

考へながら、静かに歩いていった。さうして、母親は正直な様子をし、艶の好い髻をし、さつぱりした顔付をし、赤子は、圓い顔をし、大い靴を穿いた親子二人を見ると、誰も二人は遠く國を離れた、漂泊者で、村里の街道の冷めたつ空気と、寂しき寂寞を慕つてゐるのが、すぐ思ひやられたのであつた。

旗手

一
聯隊は鐵道線路の堤上で、戦闘中であつた。さうして正面に當る林の下に集まつたプロシヤ軍を標的としてゐた。八十メートルで打つてゐた、士官達は「伏せ」と怒鳴つた。併し何んの命令に従ひたくなかつた。意氣衝天の聯隊は軍旗を取り圍んで、立つてゐた。

日没と、麥穂と、牧場の廣い地平線なかで、矇々として硝煙に包まれて、苦惱してゐた軍隊は、平坦な野原で、怖い夕立の最初の渦巻に出逢つて、驚いた歌の群のやうであつた。

この堤上に弾丸が降つてゐるからであつた。射撃の音と、溝梁に飛び込む食盒の激しい音と、それから不吉な、響の好い樂器の絃のやうに、戦場の隅から隅まで長く響き渡る砲彈が聞えるばかりであつた。

とき／＼頭の上に立つた軍旗が、射撃の風に動いて、砲煙につままれて、暗くなつた。

すると重々しい、儼然とした聲が、射撃の音や、大風や、負傷兵の叫聲を壓して高く聞えた。

「兵士よ。軍旗を守れ。」

すぐさま一人の士官が、深い霧のなかで、幽霊のやうに、朦朧として、進んできた。

すると勇ましい軍旗は、また生々として、なほ戦場に立つてゐた。

二十二回、軍旗は倒れた。二十二回、猶、温かい柄は、死んだ手を滑つたが、又持ち代へられて立つた。さうして夕暮になつて、小数の兵卒は、靜かに戦つて

退却した。

軍旗はホルニユス軍曹の手に持たれた繻布ほろまに過ぎなかつた。この軍曹こそ、その日の第二十三回目の旗手であつた。

二

この軍曹ヲルニスには三本筋の老兵で、やつと名が書ける位であつた。さうして下士官の金筋をつけるには二十年かゝつた。棄兒のあらゆる悲痛と、兵營のあらゆる魯直とが、頑固な低い額と、背囊で固くなつた脊中と、列中で兵士の茫んやりした態度に現はれてゐた。

そのせゐで彼は些し吃りであつたが、旗手となるためには、辯舌の爽やかな必要はない。

戦争のあつた其の晩、聯隊長は、

「お前は旗手だ、克く守れ。」

と言つた。

もう、すつかり雨と、砲火に曝らされた見すばらしい野營外套に少尉の金筋を卷ちらしてゐた。これが斯かる風雨に濡れる生活の唯つた一つの自慢であつた。直ぐさま老兵の身體は立ち直つた。地面を見詰めながら、脊中を圓くして歩いてゐた此の軍曹は、以後、意氣凜然とした顔付をして、この軍旗が靡くのを見、退軍と、叛逆と、死の上に、高々と、眞直に持たれるのを見るために。目を上げてゐた。

戦闘の日、革鞆にさした軍旗を握つた時には、オルニコスほど幸福な人を見かけない。彼は話もしないし、身動きもしない。牧師のやうに黙つてゐて、何か神聖なものを持つてゐるらしい。彼の全生命と、全力とが、砲彈の飛び掛つた、この立派な軍旗の廻りで、しびれた指とで。また、

「軍旗を収りにきてみる……」

と思ふやうに、眞正面のプロシヤ兵を見詰めた、喧嘩腰の眼付に籠もつてゐた。

何人も軍旗を奪はうと試みなかつた。死さへも試みなかつた。ホルニー、クラエロツトの後で、最も慘澹な戦闘に、軍旗は、傷を負けて、穴があき、ずた／＼に切られて、方々に移つた。併し何時も、この軍旗を持つてゐたのは、老軍曹のオルニテスであつた。

三

やがて九月になつた。メツツに包圍され、軍刀と大砲が錆び、世界の第一軍が、無行動と、食料の缺乏と、音信の杜絶によりて、元氣を沮喪し、熱と、又銃の足もとで、倦怠と熱から死なんとしてゐた。斯かる泥濘中の長い包圍が始まつた。長官も士卒も、もはや勝利を信じなかつた。たゞ、オルニコスばかりが信頼を懐いてゐた。軍旗が彼には、あらゆるものゝ代りを務めて呉れた。軍旗が其處にあると思ふ間は、萬事終つた氣はしなかつた。不幸にも、もう戦闘をしなくなつてから、聯隊長が、軍旗をメツツの郊外の自宅に安置しておいた。勇敢なオルニ

ユスは、子供を養なつて貰らふ母親めいてゐた。彼は絶えず軍旗のことを考へてゐた。

さうして倦怠が、強く彼を囚へると、彼はメツツまで一走りに出かけていつた。さうして何時も同じ場所にあつて、壁に凝つと立つてゐた軍旗を見たばかりで、彼は勇氣と忍耐に充ちて歸つてきた。さうして濡れた天幕の下で、戦闘の夢と、プロシヤの塹壕に三色旗をかざしながらの進軍の夢を持ち歸つてきた。

パゼーンの將軍の日々の命令は、斯かる夢想を壊してしまつた。ある朝、オルニユスが目を醒ますと、陣營が、がや／＼して、興奮した兵卒が集合して、彼等の忿怒が一人の罪人を指し示すやうに、町と同じ方向に向つて、皆んな拳を掲げながら、怒りの聲を上げて激昂してゐた。

「さうして来て。銃殺しよう……」
と叫んでゐた。

士官達は言ふ儘に、させて置いた。彼等は部下に對して、恥辱を待つてゐるやう

に、頸垂れながら、些し離れて歩いてゐた。

ほんとに其れは恥辱であつた。立派に武装して、まだ健全な五萬の兵を前にして、彼等を戦はず敵手に引き渡すと言ふ將軍の命令を読んだ處であつた。

「軍旗は、何うしたか……」

と青ざめた、オルニユスが訊ねた。

軍旗は小銃や、輜重の殘物など、あらゆる物と一緒に、敵へ渡された。

「怪からん。俺の軍旗は渡しておくものか……」

と憐れなオルニユスは吃つた。

さうして彼は町の方へ駈けだし始めた。

四

其處にも、怖しい激昂があつた。國民軍や、商人や、志願兵は叫んで、騒いでゐた。委員は震ながら、通つて、將軍の處へ赴いた。オルニユスには何にも聞え

なかつた。何にも見えなかつた。彼は夢中で、フオプールの町を登りながら、獨言をいつてゐた。

「俺の軍旗を取り上げる……それが、なんだ。そんなことが出来ようか。そんな権利があらうか。將軍の私物をプロシヤ兵にやるが好い。金色塗の馬車や、メキシコから持ち歸つた綺麗な皿を敵に渡すが好い……併しあの軍旗は俺の義務だ……俺の名譽だ……軍旗に觸れることを許さんぞ……」

言葉尻が、歩くせゐで切れてしまつた。彼の文句は短かつたが、思想が隠れてゐた。それは軍旗を奪つて、聯隊の眞中に持つてゆき、軍旗に續かうと思ふ人達と一緒に、プロシヤ兵の腹を踏越えて、進まうとする簡單、明白な考であつた。彼が聯隊に行くと、通して呉れなかつた。

聯隊長も、疝癢を起して、誰にも逢ひたくなかつた……併しオルニユスは此んな事では聴かなかつた。

彼は誓つた。怒鳴つた。彼は傳令使と押し合つた。

「俺の軍旗だ。俺の軍旗が欲しいのだ。」
とう／＼窓があいた。

「お前か、オルニユス……」

「はい、聯隊長殿、私です。」

「軍旗は、皆んな造兵所にある、お前は其處に往きさへすれば好いのだ。請取を請求するだらう……」

「請取……どうしてです……」

「將軍の命令だ。」

「でも聯隊長殿……」

「うるさい……」

窓は閉まつた。

老軍曹のオルニユスは酔漢のやうに、よろ／＼して歩いた。

「請取……請取……」

と彼は器械的に繰り返してゐた。
さうして唯つた一つの事柄が解らずに、彼は、とう／＼歩きだした。それは軍旗が造兵所にあつて、どうしても、もう一ぺん軍旗に逢はなければならぬことであつた。

五

造兵所の門は、プロシヤ軍の行李を入れるために、開け放してあつた。敵軍の行李は、中庭で待つてゐた。オルニユスは這入ると、ぞつとした。

他の旗手達がすつかり其處にゐた。それは五六十人ほどの士官で悼しく黙つてゐた。雨に打たれた薄黒い行李車、そのかげに集つた帽子なしの兵卒、葬禮のやうであつた。

98 片隅には、パゼーヌ軍隊の軍旗が、悉く、泥だらけの舗石の上にごちや／＼して、積み重なつてゐた。この燦爛とした絹の斷片、金總の残り、細工をした柄の

折れ、泥濘と雨に濡れた光榮ある、斯る軍需品が地面に投げ捨てられたことより悲しいものはなかつた。管理の士官が、一つ／＼軍旗を取つた。

各聯隊の名を呼ばれると、旗手は前に進んで請取を貰らつた。
硬張つたプロシヤ士官が二名、この様を凝つとして見張つてゐた。

あゝ、軍旗だ。神聖にして、光榮ある軍旗だ。御身は、裂け跡を見せながら、翼の傷いた鳥のやうに、悲しく舗石に裾を引きながら、斯くして敵軍に渡つてしまつた。御身は汚がされた美しい物の恥を含んで、立ち去つてしまつた。御身の何れもは、佛蘭西の何物かを持つていつたのだ。長い行軍の日影は、曩の間に残つてゐた。彈丸の跡は、狙はれた軍旗のもとに、ふと倒れて、人に知らず死んだ幾個の思出おもひだを具へてゐた。

「オルニユス、お前の番だ。お前を呼んでゐる……請取を取りに來い……」
ほんとに受取のことであつた。

軍旗は彼の前にあつた。あらゆる軍旗中で切れた、最も美しい彼の軍旗に違な

かつた。

それを見ると、彼はまた、堤上に立つてゐた気がした。砲弾や、碎けた食盒や、聯隊長の

「軍旗を守れ……」

といふ聲が聞えてゐた。さうして二十二人目の旗手は倒れた。二十三人目の旗手であつた彼は、自分の番になると、身を起して、かけつけ支へる腕のないまゝに、ぐらく動いてゐた憐れな軍旗を手にしたのであつた。あゝ、その日、死ぬまでも、軍旗を守つてゐようと誓つたのであつた。然るに今は何事だ……

さう考へると、心ぢうの血潮が、頭に上つてきた。悄然と、がっかりした彼は、プロシヤ士官の方に、進んで、最愛の軍旗を手に捉へるや否や、奪ひとつた。さうして彼は、

「軍旗を守れ……」

と叫びながら、眞直に高く軍旗を立てようと試みた。

併し彼の聲は咽喉元でとまつた。彼は軍旗の柄が、震るへて手のなかに滑べるのを感じた。斯る空氣中に、また降参した町に、斯うも重くかゝる死の空氣中には、勇ましいものは、もはや生活してゐなかつた。さうして老兵のオルニユスは、がっかりして倒れてしまつた。

シヤウバアンの死

八月の日曜日であつた。私が初めてシヤウバアンに逢つたのは車中のことで、當時の言はゆるスペイン・プロシヤ事件の初め頃であつた。

私は是まで彼を見かけたことは一度も無かつたが、直ぐさまシヤウバアンだと思つた。彼はひ、ろ長く、白髪で、赤ら顔をし、鵬の嘴みたいな尖がり鼻で、圓い眼が何時も怒を帯びてゐた。その眼は、片隅の勳章を帯びた人に對してばかり優しかつた。

額は狭く、低く、強情らしく、いつも同じ思想が絶えず同じ處に働いて、大それた深い、唯た一つの皺を掘つてしまつたやうな額の一つであつた。様子付きには

諄朴らしい、軍國主義者らしい點が何處かあつて、殊に佛蘭西とか佛蘭西國旗とか言ふときには、Rの音を卷舌で發音する怖ろしい仕方をやつてゐた。

「シヤウバアンだ。」

と私は思つた。

實際、シヤウバアンであつた。彼は上機嫌で、身振をしたり、誇つたり、新聞でプロシヤを恥かしめ、伯林に這入ると、杖を揮ひながら、酔ひくづれて、啞で、聾な、物凄い狂者であつた。猶豫もなければ、和睦もないのだ。戦争だ。どうしても彼には戦争が必要なのだ。

「もし私達が準備してゐなかつたら……」

「佛蘭西人は何時も用意をしてゐるよ。」

とシヤウバアンは立ち上りながら答へた。逆立つた髯の下からRの發音が迸つて、窓硝子を振はした……怒りつばい馬鹿だ。

彼の名の廻りに歌はれる古い悪口と、滑稽な名高さも尤だと思つた。

斯うして最初に逢つてから、私は彼の目を避けようと誓つた。併し不思議な運で、殆ど絶えず道で出逢つた。最初、元老院で、グラマン氏が宣戦布告のことを議員に發表しに來たとき私は彼にあつたのであつた。斯かる喝采の震え聲中に、「佛蘭西萬歳」といふ怖ろしい叫び聲が、傍聴席から發した。柱頭裝飾の上部を見ると、シャウバンの逞しい腕が、動いてるのが目に這入つた。それから暫くたつと、オペラ座で復た御目にかゝつた。そのとき彼はヂラルダレの棧敷に立つてゐて、ライン・アルマンの歌を歌つて呉れと求めて、その歌を知らない歌手に「ライン・アルマンを取るより此歌を覺える方が餘計に時間がかゝる」と叫んでゐた。

やがて其れは附纏ひであつた。往來や、遊歩路の曲り角でも、到る處、馬鹿者のシャウバンは何時も腰掛か、卓子の上に坐つて、太鼓や、風に靡く軍旗や、マルセイエースの國歌のなかで、私の目に附いた、そのとき彼は出發する兵士に巻煙草を配つたり、野戰病院を喝采したり、燃えるやうな顔をして、群集を制して

ゐた。それは巴里に六萬のシャウバンがあるかと思はれるほど、騒々しかつた。この堪へ難い光景から逃れるには、門と窓を閉ざして、家に閉ぢ籠つてゐることであつた。

ウイセンブルクや、フホルバックの役後、また澤山續いて起つた災難のあとで、萬事都合よく行く方法が何處にあらうか。その澤山な災難は、あの悲しい八月を、殆ど間斷ない悪夢、重苦しい、熱苦しい夏の悪夢としてしまつた。吃驚した顔を^{びつくり}して瓦斯燈の下を、夜もすがら彷徨ひながら新しい通知や、掲示にかけつけ、此の生々とした不安に、どうして係り合はずには居られよう。こんな晩にも、私はシャウバンに出逢つた。彼は群集から群集へと、遊歩路のほとりを歩いてゐた。さうして萬事に拘らず、希望に充ち、成功を確信して、「ビスマルクの白裝甲兵が極度に粉碎された」と云ふ事を幾度も立續けに繰り返しながら、靜肅な群衆の眞^ま中^{なか}で長談義をやつてゐた。

不思議なことだ。もう私にはシャウバンが滑稽にも思はれなかつた。併し彼の言

つたことを一言も信じなかつた。併し仕方がない。彼の話をきくのが愉快だつた。彼の盲目な考と、傲慢な馬鹿さ加減と無智とに心附いたが、またこの怖しい人間中に、我々の心を温めるやうな心の炎のやうな、生々とした、強い力を感じた。包圍の長い間、犬をバンとして喰べ、馬肉を牛肉として喰べてゐた此の怖ろしい冬期中には、斯かる事が必要であつた。巴里人は、皆んな、「シャウバンがゐなかつたら巴里は一週間、續かなかつた」といふために、後にゐた。初めから、トロシユは「プロシヤ兵は好きな時に圍むのだ。」と言つてゐた。

「プロシヤの奴等が圍むものか」

とシャウバンは言つてゐた。シャウバンは信念を持つてゐた。シャウバンは何でも信じてゐた。ハサセーンをも、包圍突出をも信じてゐた。毎晩々々彼はエタン方面のシャヂーの砲聲を聞いてゐた。イーキエニの後方にあたるヘーテルプの砲聲を聞いてゐた。さうして最も心強かつたことは、我々が其の砲聲を聞いてゐることであつた。それほどまで勇武なシャウバンの靈魂が、我々にまで擴がつて

しまつた。

勇敢なシャウバンよ。

黄ろく曇つた空のなかで、誰れより先きに、傳書鳩の白い翼を見つけたのは何時も彼れであつた。ガンベツタが、傳書鳩を一羽送つて呉れた時に、役場の門前で四邊に轟く聲を張り上げながら、信書を読み上げたのはシャウバンであつた。

十二月の寒さ酷しい晩、屠牛場の前で、長い尻尾が空しく待つてゐると、シャウバンは勇しく、その列を取つてやつた。彼のお蔭で、饑ゑた者達は、なほ笑つたり、歌つたり、雪の中で、輪踊をする力を見つけだした。

「ル・ロン・ラーロンレンにフロシヤの奴等を通してやれ。」

とシャウバンが歌つた。靴は調子よく響いた。羊毛の婦人帽を被つた哀れな人達の顔は、暫らく健康な色を帯びてきた。

併し何の役にも立たなかつた。ある晩、トルーオ町を通ると、心配らしい群集が靜かに市役所の前を通るのが私の目に這入つた。車も燈あかりもない大巴里で、

「モンマルトルの坂を取らう……」
と厳かに響きだしたシャウパンの聲が聞えた。一週間立つと、それは最後であつた。

この時から、シャウパンは、ちよいと、私の目にとまる許りであつた。二三度、遊歩路で彼が身振をしながら、復讐の話をしてゐるのを見かけた。——その時にRの音を強く響かしてゐた。併し彼の言葉をきくものは、もう一人もなかつた。氣取者の巴里は、快樂に係り合ふには疲れてゐた。労働者の巴里は怒つてゐた。哀れなシャウパンが大い腕を動しても甲斐が無かつた。彼が近づいてくると、人が込み合ふどころか、散つてしまつた。

「うるさい奴だ……」

と群集は言つた。

「獨探め……」

と他の者は言つた。

それから巴里騒動の日がやつてきた。革命黨は赤い旗を立て、巴里は黒人に支配されてしまつた。シャウパンは嫌疑を受けたので、もう家から出なかつた。併し有名なデダール・ロンナジュの日に、彼はウアトーム廣場の片隅にゐたのに違ない。嘸かし、彼は群集の中央に居ることゝ誰れも考へてゐた。處が彼の姿が見えないので、野次馬は罵つた。

「お、シャウパンは何うした……」

と群集は叫んでゐた。軍が負けた時、シャンパンを飲んでゐたフロシヤ士官が「シウヤパンさん」と叫んで洋杯を舉げた。

五月二十五日まで、シャウパンは生きてゐる標しるしを與へなかつた。穴藏の奥に踞まつて、彼は佛蘭西の爆裂彈が、巴里の家根の上に響くのを聞いて、がっかりしてゐた。とうとうある日、彼は敵味方の砲撃中に、思ひきつて足を入れた。町は淋しくつて、廣かつたやうであつた。

一方には砲列と赤い旗と一緒に防障が、傲然と聳えたつてゐた。他の一方には

ウアンセンヌの小獵騎兵が、屈みながら壁に沿うて、銃を前にしながら、進んできた。ウエルサイユの軍隊が巴里に這入ってきたのだ。

シャウパンの心は飛び廣つて、「佛蘭西萬歳」と叫んで、兵卒の前に飛びだした、彼の聲は兩軍の射撃中に消えた。彼は不幸にも兩方から誤解されて、銃殺されたのであつた。死骸が壊れた土堤の中央に轉がつて行くのが見えた。彼の死骸は腕を伸ばし、生気ない顔をして、二日間残つてゐた。

斯うしてシャウパンは死んだ。彼は巴里騒動の犠牲であつた。それは最後の佛人であつた。

我が軍帽

今朝、私は軍帽を見付けだした。軍帽は戸棚の奥に忘れられて、埃で色がすっかり醒めてゐた。縁がほごれて、線が錆び、色もなく、殆んど形さへ無かつた。其を見ると私は笑はずには居られなかつた。

「やゝ、俺の軍帽だ……」

すぐさま私は太陽と激昂とで熱かつた晩秋の一日を思ひだした。その日に、私は新しい軍帽を被つたので、傲然としながら、市街の大隊に落ち合ひ、市民兵の義務を盡すために、店の硝子に銃を入れて、町に降りて往つた。私が巴里を救けられず、今巴里を解放することが出来まいなどと言ふ奴は、銃劍で、お腹を貫き

透される憂目に逢ふ所であつた。
誰れも此の國民軍を便りにしてゐた。公園に於ても、設棚園に於ても、並木路に於ても、四つ角でも、軍隊が軍服の間にブルーズを交じへ、軍帽の中に普通の帽子を並べて、整列し 點呼されてゐた。何故と言へば大至急のことであつたら……

私達ほかの者は、毎朝、低い穹窿や、霧と風通しに充ちた大い門の廣場に集まつた。點呼がすむと、醜い念珠のやうに並んだ人達が、練兵をやりだした。齒を食ひしめ、身體に眩をつけて、小隊が、左右の號令につれて、號令で歩きだした。皆んな大い者に、小さい者に、様子ぶるものに、病人も、アンピキュの勳章のついた軍服をつけた者も、彼等を頌歌隊の子供の様子らしくさせる青い、高い帯をして質素なアンヘートンも、皆んな小さい廣場の周圍で、確信を懷いて、快濶に、廻ぐつてゐた。

この大砲の大い低音が無かつたら、滑稽であつたかも知れない。私達の訓練に

輕快と、廣濶を與へる不斷の伴奏は、聲の細すぎる號令を遮り、不器用と不熟練とを減して呉れた。包圍された巴里の斯かる大きな芝居のなかで、場面に激情を與へようとして用ひる舞臺の音樂が使はれてゐた。

最も立派なのは、私達が要塞に登る時であつた。霧深い朝、七月隊の前を傲然と通つて、「捧げ銃」の敬禮を表したことを今だに思ひだす。さうして人込みのしめてゐるシャロン街の長い往來、大そう歩きにくい滑らかな舗石、それから陵角堡に近づく、「突撃」を打つた太鼓の音、今でも其處にゐるようだ。巴里の國境、大砲の車輪に四面を掘られ、並列した幕舎に活氣だつた緑の土堤、露營の煙、銃劍の尖きや、軍帽の端に結んだ澤山の背囊を越えて、高い處を備ふ小さい人影は悼ましかつた。

あゝ、私が初めて立つた夜間哨兵、暗闇と風との中に、手ざくり巡視、濡れた土堤に沿うて、押し合ひながら、道に迷ひ、私一人はセンサールクユの門上にとまつて、怖しい坂の上に残されてしまつた。あゝその時程、待遠しい嫌な時間は

なかつた。町と田舎に擴がつた、只沈黙のさなかに、風は要塞の周圍を吹き走つて、哨兵を屈ませ、號令を消し去り、同じい巡察途上、古い街燈の硝子を、がたがた吹いてゐた。その風が耳に這入るばかりであつた。いつも槍騎兵の軍刀の曳摺る音が聞えた。私は銃を高く差し上げて、留まつてゐた。誰れでも居たら嘯みついてやらうと思つた。俄かに雨が冷めたくなつた。空は巴里は上て明るんできた。塔と圓家根が見えてきた。馬車が一臺、遠くを駈けてゐた。鐘が鳴つた。大い都會が目を醒ました。巴里が目醒めきはに、先づ身を振るはして、稍、活氣を振ひ起した。土堤の片方では雄鷄が鳴いてゐた。私の足許では、まだ暗いなかに、足音と、劍の響が聞えた。私が怖しい聲をだして、

「止まれ。誰れだ。」

ときくと、

「珈琲賣の女です」

といふ、おづ／＼した、振へ聲が霧のなかから私の方へ昇つてきた。

まあ、どうしよう。その時は包圍の初期であつた。群れな國民兵の私達は、プロシヤ兵が要塞の砲火を潜つて、要塞の麓まで到着し、梯子をかけ、清らかな夜、ウーラの叫びと暗闇に輝く槍のさなかを遁つて攀ち登つてくるのも間近のこと、想像してゐた。

此う想像をしては、皆んな何れほど警戒してゐたかを察して呉れ給へ。殆ど毎夜「武器を取れ」と目を醒まして、立ち上がることに、又銃を引くり返して、押し合ふことゝ、驚いた將校達が自分自身を落ち着けようとし「落ち着け、落ち着け」叫ぶことゝであつた。

夜があげると、可哀さうに一匹の逃がれ馬が目附いた。この馬は要塞の上を飛びながら、土堤の草を喰べて、裝甲兵の一中隊と見間違られて、全稜堡の標まどになつてゐたとは夢にも知らなかつた。

私の軍帽が思ひ出さして呉れたことは是れだけであつた。夥しい情緒と、出來

事と、光景と、ナンテール・クールモーヴェル、ムランシー・サケーとマルヌの美しい一隅などを思ひださして呉れた。其處では勇敢な九十六聯隊が、最初に、また最後に砲火を交へたのであつた。

プロシヤ軍の砲座が私達の正面にあつた。それは枝の間から煙の昇るのが見える静かな村落のやうに、林のかげになつた道畔みちのべに据ゑられてゐた。上官が私達を忘れて其處へ置きざりにしてしまつた。陰蔽物のない鉄路上に、爆裂弾が雨のやうに降りそゞぎ、轟然と爆發して、不吉な火花を散らしてゐた。

あゝ私の憐れな軍帽よ、その日、お前はさほど勇ましくなかつた。お前は不適當なほど、頸をさげて、幾度もく敬禮をしてゐた。

關ふものが。美しい追懐だ。やゝ可笑しいが、あゝ武勇の飾を帯びた、追懐である。もしお前が他の追懐を思ひ出させなかつたら……

不幸にも、巴里の夜警や、貸店内の哨兵、息苦しい暖爐、擦れた腰かけ、町の光景を小川のなかに映しだす、濡れた廣場前に立つた役所前の番兵、小山のな

かの斥候、浮浪の徒が酔つてゐたり、彷徨つてゐる所を集められた兵士、淫賣婦と盗人、埃だらけな疲れた顔をして這入つてくる蒼白い朝、煙管と石油と海草と着物の糊などの追懐があつた。嫌な長い日、議論に充ちた士官の選舉、別れの酒、小さい洋杯の廻し飲み、燐寸の先で、珈琲の卓子の上で説明された戦略、投票、政治、どうして好いか解らぬ無行動、身體を動かして、身體を動したくないながらも、何んにもしないで浪費した時間などの追懐があつた。間諜狩り、馬鹿馬鹿しい疑惑、大げさな信用、團をなした包圍突出撃、包圍された人民のあらゆる狂愚と、あらゆる狂熱などの思ひ出……

私が、この怖しい軍帽を見て、思ひだすことは、これであつた。

軍帽よ。お前も、かゝる狂愚を持つてゐたのだ。若しヒウスワアルの翌日、私が戸棚の上から、お前を投げ棄てなかつたら、また何處までもお前を保存して、不朽のものと金筋とでお前を飾つてやり、散々ちりくばらばらと大隊の違つた番所を殘して置くやうな人達のやうに、私がお前を大事にしておくなら、私はお前を被つ

て防障の上には出られない筈だった。あゝ、まったく反抗と不規律の軍隊、怠惰と、陶酔と、クラブと無駄話の軍帽、騒動の軍帽よ、私はお前を隅つこに残しておいたが、お前は其れほどに、取り扱はれる値打もないのだ。
屑屋の籠に這入るが好い。

コンミーン又の鼓手

それは土着輕騎兵の小さい鼓手であつた。カドールと言ふ名で、ジャンデル種族の出であつた。さうして僅かなアフリカ土着兵の中間に加はあつたのであつた。この土着兵は、ヴィノワ軍隊の後に蹤いて、巴里に急着したのであつた。
この鼓手はウイセンブルからシャンピギイまで、鐵の四竹とアラビヤ太鼓を持つて、嵐にあつた鳥のやうに、戰場を踏み越えて、戦列に加はつてゐた。砲彈は彼を何處に堪へて好いか解らないほど、彼は敏捷であつた。併し、冬になつて、この小さい黄銅造からかねづくりのやうなアフリカ人は、機關銃の砲火に赤くなつてゐたが、夜間歩哨と、雪の上に、動かないでゐることが我慢出来なかつた。さうして一月

のある朝、寒さで足が凍り、身體が硬張ばつて曲がつた彼をマルタの道ばたに見つけた。彼は野戰病院に長らく這入つてゐた。そこで私は、彼と初めて顔を合はせたのであつた。

病犬のやうな悲しく、我慢強い彼は、しとやかな大い目をして見廻はしてゐた。話しかけると笑つて齒を見せた。それが彼には出来るだけのことであつた。何故といへば私達の言葉を知つてゐなかつたから……

彼は、やつと方言が話せる許りであつた。この方言は伊太利とアラビヤの方言から出来上つたもので、丁度、貝がらのやうに、ラテン海に沿うて掻き集めた者であつた。

カドールは氣晴しに、自分の太鼓があるばかりであつた。とき／＼彼が飽き果てると、太鼓を病床に持つてきてやつた。太鼓を打つことを許してやつたが、ほかの病人の手前もあるので烈しく打つことは許さなかつた。

すると黄ろい日に照らされて衰へた、大そう陰氣な、憐れな顔と、町から見え

る悲しい冬景色とが、太鼓の調子に連れて、活躍して来た。

時として彼は「突撃」を打つた。白い齒並の光が猛々しい笑のなかに過ぎた。時には彼の眼が回教徒の衆會を思ひだすと、濡れてゐた。彼の小鼻は膨れた。

野戰病院の無趣味な香ひのなかで、薬粉と、外科用の緊厭布に取り圍まれて、彼は、橙のたはゝに實るブリターの森や、白粉を顔にぬり、馬鞭草の香を帯びた少女の湯上姿を思ひ出した。

斯うして二た月過ぎて往つた。巴里は二た月の間に、いろ／＼なことをした。併しカドールは些いとも氣がつかなかつた。彼は巴里に歸つてくる武装解除の、疲れた軍隊と、そのあとで、朝から晩まで、がらく／＼曳摺つて行かれる砲車の窓下を通つて行くのが聞えた。それから警報鐘や、砲聲が聞えた。

そんな音を聞いても、彼には些つとも解らなかつた。彼の足が癒つたから、やがて戦へるだらういふことゝ、また戦争をしてゐるといふこと以外には何も解らなかつた。

彼は太鼓を脊中にして、戦線を探しに出かけた。彼は長らく探してはゐなかつた。通りかゝつた聯合軍は彼を巴里に連れて往つた。

長らく訊ねていたが、ボノ・ベセフ・マカシユ・ホノよりほかには何にも見出さずことか出来なかつたので、この日の将官は、彼に十フラントと、乗合馬車の馬を與へてしまつた。さうして参謀官に附屬させた。

巴里府廳の参謀本部では、いろんな物が些しあつた。赤いストクタイユと、ポランダの上着と、ホンゴリヤの襯衣と、水兵の襯衣と、金と、天鷲絨と、銅片と、組糸の裝飾などがあつた。彼は黄ろい縁取りの紺春廣と、頭巾を着けて、太鼓を持ち、立派に假装をしてしまつた。

日にやけた斯かる美しい中隊と、武器と軍服の混亂中の這入つたのが嬉しくつて彼は言ひ知らぬ活氣と、自由を維持して繼續するプロシヤ軍に對する戦争だと思ひ込んで、ちつとも氣が附かずに、巴里人の大舞踏會に這入つた。さうして其時大に名を歌はれた。

到る處、彼が通ると、同盟軍は彼を喝采して、彼を歓迎した。ラ・コシミームは彼を人に見せびらかし、摘示したら、帽章のやうに何處へも彼を連れてゆき、彼が居るのを、大そう誇りとしてゐた。日に二十度ほど、廣場は彼を市役所の戦に送つた。何かと言へば、彼等の水兵は唯の水兵で、輕騎兵は唯の者だと言つてからであつた、

些くとも、彼は眞のアフリカ土着兵に違ひなかつた、さうだと確信するのには、猿のやうな目ざめ顔と、馬の演戲で、彼が馬上で身體を動かす荒々しさを、見さへすればよかつた。

然しカドールの幸福には何か不足してゐた。彼は戦ひたかつた。彈丸が打ちたかつた。不幸にもコンミューンの治下には帝政時代と同じく、参謀官は、幾度も戰場へは臨まなかつた。

散歩や、教練以外に、彼はウハアンドーム廣場や、陸軍省の中庭で時を過してゐた。何時も彩布のブランデーの御馳走と、底を抜いたハムの圓樽、風のふき通

すきなかで、御馳走も充ちた、大騒ぎの陣營中で、彼は時間を過してゐた。そこでは、なほ包圍當時の饑餓を感じてゐた。

カドールは此んな食道樂の仲間に入らるには、善良すぎる回教徒であつたから、彼は従順なく、眞面目に、些し離れて立つてゐた。

さうして片隅で行水を取り、些しばかりのスームールに、クースクスを喰べてゐた。

それから些しばかり太鼓を打つてから外套にくるまつて、露營の焚火に温まりながら敷臺に寝てゐた。

五月のある朝、カドールは物凄い鐵砲の音に眼が醒めた。參謀本部内は大騒ぎであつた。皆んな逃げだした。

彼も思はず夢中になつて、他人の眞似をして、馬に乗つて參謀官の後から蹤いて往つた。往來には狂氣になつた喇叭卒と、混亂した中隊とが充つてゐた。人は敷石を剝がして、防障を築いた。何だか一大事が起つてゐるに違ない。河岸に近づ

くに隨つて射撃の音が明瞭になり、騒ぎが益々激しくなつた。

コンロールの橋上でカドールは參謀官を見失つた。些し進むと、彼は馬を取られてしまつた。市役所で出來事を見るのは、階級の高い士官でなければならなかつた。カドールは大そう怒つて戰場の方へ駆けだした。彼は駆けながら、鐵砲に丸を籠めて、齒を噛みしめながら、マフカ・ポノと言つてゐた。何故と言へば、一時はプロシヤ兵が這入つてきたのと思ひ違へてゐたから……

もう砲彈がチュイリー樹の草蔭で、方尖塔の周圍に響いてゐた。リホリ街の防障では、フルーランの復讐人が「やあ、鼓手、鼓手」と彼を呼んでゐた。彼等は十二人ほどゐたばかりであつた。併しカドールばかりに取つては一軍隊の値打があつた。

彼は防障の上に立つて、軍旗のやうに傲然として華々しく、彈丸の霰と飛ぶなかを飛んだり、叫んだりして戦つた。やがて地面から立ち上ぼる煙の幕が二の遠列の間に、些し陥つた。さうしてシャン・ゼリゼーに集まつた赤い洋袴が目にと

まった。それから萬物が混亂した。ガドールは間違つたと思つた。

忽ち防障が静かになつた。最後の砲兵が最後の砲火を發して、逃げた處であつた。カドールは動かなかつた。彼は隠れて、思ひださうと身構へながら、確かり着け劍をして、尖つた軍帽の出るのを待つてゐた。一列が來たのであつた。

突撃歩調の怖い音のなかに、士官達は、

「降参しろ」

と叫んだ。

ガドールは一時、茫然としたが、銃を差上ながら飛びかゝつて、

「佛蘭西萬歳」

と叫んだ。

カドールは野蠻人の意識ながらも、それはアイテルブカシャン子一の解放軍で、巴里人が待ちかねてゐたものだと思つて茫然やり考へた。それゆゑ彼はどれほど嬉しか

つたらう。また何にほど彼は白い齒を出して笑つたらう。直くさま防障は侵入されてしまつた。人は彼を取り圍んで押したふした。

「お前の銃を見せろ。」

彼の銃は未だ熱かつた。

「両手を見せろ。」

彼の両手は火薬で黒かつた。彼は嫣然にっこりと笑ひながら何時も威張つて手を見せた。すると人は彼を壁に押しつけて殺してしまつた。

彼は何やら薩張り解らずに死んだのであつた。

ア ル サ ス

數年前のことであつた。私はアルサス旅行を企てた。それは最も面白い旅行の一つであつた。軌道や、電線で縦横に張られた景色ばかりを覺えてゐる眞趣味は鐵道旅行ではなかつた。旅行囊を脊負つて、丈夫な杖と、さほど饒舌でない仲間を連とした、徒歩旅行であつた。すれは好い旅行の仕方だ。斯かる旅行だと、見た事が残らず、ちやんと心に残つてゐる……

殊にアルサスの成熟期である今では、この亡國から、素晴らしい田舎の長い散歩の思はぬ趣味と一緒に、古への印象が悉く私の胸に歸つてくる。アルサスの田舎では日光に濡れた平和な村に、林が大きな、青い幕のやうに起つて、山かどには

小川の通つてゐる工場や、木材挽場や、水車や、平野の青々とした涼しさから、俄かに見えだす、珍らしい衣服の華々しい色合が見えてゐた。

毎朝、夜の白ら／＼あけに、私と私の連れは起きてゐた。

「旦那様、四時です。」

と宿屋の召使が叫んでゐた。

直ぐさま私達は寢床から飛びだした。

背囊にビヂヤウをかけて、手さぐりで、響の好い、脆い木梯子まはしごを降りて往つた階子を降りると、出かける前に、大きな旅館の臺所で、キルクを一杯飲んだ、其の臺所には、霧で濡れた窓を偲ばせる葡萄蔓の芽が顔へて、火が早くから燃えてゐた。そのあとで私たちは出かけたのであつた。

初めの間は辛らかつた。前の日の疲労が、すつかり出てきた。眼と空氣のなかはまだ睡眠が残つてゐた。併し、だん／＼寒い露が消えて、霧が日にあつて消えていつた。私達は歩いてやつた。

蒸し熱くなると、私達は止つて、泉や小川の邊りて晝食を使つた。さうして流水の音を聴きながら、草の上に寝込むと、彈丸のやうな羽音をして、そば近く飛び廻はる大い蜂の羽音に目がさめるのであつた。熱さが過ぎると、私達はまた歩き出した。やがて日が傾いてきた。だん／＼道が狭くなつてきた。私達は目標と、宿とを求めた。宿屋の寢床に、開け放した納屋に、白の足もとに、鳥の囁きや、葉うらに宿る無数の蟲に取り圍まれて、私達は露天に寝たのであつた。斯かる夜の音は、酷い疲の身に取つては、夢の始まりのやうであつた。

私達が出逢つた、道ばたに散在する村里の名は何んと言つたらうか。もう今となつては、ちつとも覚えてゐない。併し、この村落、ことに、オート・ラインの邊では、いろ／＼違つた時刻に眺めたが、どれもこれも、すっかり似寄つて、唯つた一つ村落を見たやうであつた。

大い町、錫で額をとつた小さい窓硝子、蓬草と薔薇を飾り、透かし窓、其處には、老人が大きい煙管を吸ひながら、凭りかゝり、妻が道ばたの子供を呼ばうと

して、靠れてゐた……

朝、私達が其處を通ると、何にもかも寝てゐた。厩の藁が動く音と、門の下に睡る犬の息が微かに聞えた。二里ほど遠くゆくと、村落が目を醒ました。鎧戸の開く音や、桶のぶつかる音がしてゐた。小川は溢れてゐた。重々しく牝牛は、長い尻尾で蠅を追ひ拂ひながら、水池に往つた。少し往つても、同じやうな村であつた。併し夏の午後深い静寂とがあつた。地面に通つた杖を辿つて別荘の家根の學校のメロベにまで登る蜂の羽音があるばかりであつた。

とき／＼野原の片端に、村里の片隅ではないが、廣々とした一地方の隅に、二階立ての家があつた。代證人の門章と醫師の呼鈴がついてゐた。通りがよると、日影のさした街道の青い窓から、古びた歌と、ピアノのヴァルスが聞えた。纏て夕焼のころになると、家畜は歸つてゆく。人々は紡績工場から歸つてきた。皆んな門のところを集まつて、往來では子供が遊んでゐた。さうして何處から來るか解らない、赤か／＼とした夕日に窓硝子が照らされてゐた。

私が今だに嬉しく思ひ起すのは、日曜の朝の祈禱のことだ。町には人影がない。家には老人がゐるばかりで、彼等は門の前で日向ぼっこをしてゐた。教會は一杯であつた。朝早く、蠟燭の燃えたり、消えかゝつたりする美しい色合に染められた窓硝子、通りかゝると、一時に聞える聖歌、神の法衣を着た頌歌隊の子供が帽子も被らず、香爐を手にして、パン屋に火を求めに行くために、そつと廣場を通つていった。

時には村里に這入らずに一日中、止まつてゐた。私達は藁主樹を求め、間道とライン河畔にあつて、その美しい緑の水が、昆蟲の羽音で騒しい沼地の片隅にきて無くなる凍えた小さい林を探した。遠くから遠くへ、枝のさしかはした細道を通つて、大きい川が見えた。その川には筏や、島のなかで苧り取つた草を載せた船に充ちてゐた。その船は水流に流されて、小島の點在するやうであつた。

それからライ河のローメ運河であつた。運河の長い縁には、楊柳が並んで、見馴れた、狭い河岸に押し込められたやうな水のなかに縁の葉末を浸してゐた。其

處ら、此處らの嶮岸には、水門の番小屋、水門の柵上を裸足で駆ける子供があつた。泡の迸るなかを、運河の廣さだけを塞いで、大きい船が進んでゆく。

それから、私達は、かなり曲がつたり、ぶらぐ歩いたりすると、樹蔭の涼しい胡桃の植はつた、白い狭い街道を又歩いて行く。此の街道はウオスジュの山脈を右にし、レスウアルウアルトを左方にして、パールの方に上つてゆくのであつた。

あゝ、七月の重苦しい太陽に照らされて、ロールの道ばたに足を停めた快よき。彼方此方と呼び交はしてゐた鷓鴣と連れ立つて、堀の乾いた草の上に長々と寝てゐた。街道は私達の頭の上で悲しい様子をしてゐた。買物運搬車の音、鈴、車軸の音、石屋の石をかく音、歩いてゐる鷺鳥の夥しい群を騒がす憲兵の早足、行李を脊負つて疲れた行商などがあつた。

赤い糸を織りませた紺のフルーズを着た郵便脚夫が、俄かに街道を離れて、茨垣で取り捲いた小さい塙のなかに這入つていった。そこからは小さい村と、農家

と、かけ離れた孤獨生活のあるのを感じた。

徒歩旅行の斯かる美しい思ひもつかぬこと、伸々とした縮圖、荷車の齒と、馬の足が作る間違ひやすい道、その道は畑の美しい中央へ導くのであった。開けたくない静かな門、一杯立込んだ旅籠屋、夏の日の快い夕立、それは熱い空氣中に早く蒸發して、野原と羊毛と、牧人の外套まで煙らすのであった。

私は怖しい嵐を覚えてゐた。私がアルサスのバロデを降りて、斯ういふ風に、私達を驚かしたのであった。私は高地の旅館を立ち出でると、雲が頭の上につきつてゐた。數株の糸杉が雲よりも高かつた。併し私達が降りてゆくのに隨れて、まったく風と雨と霰のなかに這入つてゐた。私達の直ぐそばでは、一株の糸杉が雷に撃たれて轉がつた。

小さい道を降りてみると、篠つく雨を通して、ほら洞穴に雨を避けた小娘の群が目に入つたのであった。娘達は怖はがつて、互に押し合つて、兩手に印度布の前垂を持ち、さつき摘んだミルチルの實を持つてゐた。この實は光線を受けて光つ

てゐた。洞穴の奥から私達を見詰めてゐた小さい黒い眼、濡れたミルチユの實に似通つてゐた。坂に擴がつた大い杉、雷の音、襪襪を纏つた、可愛らしい森の使女、——シユシド僧の物語めいてゐた。

併し、ルージュ・グットに着くと、何んと快い火の御馳走であつたらう。オムレツプ焰のなかに飛んでゐた間に、着物を乾かすには、なんと快い圍爐の火であつたらう。それは御菓子やうに、芳ばしく、金色をして、雙べものゝないアルサスのオムレツトであつた。

この夕立の翌くる日、私は悲しい有様を目にしたのであつた。

タンヌマリイの途上、生垣の曲がり角に、素晴らしい、荒れた、妨りとられて、雨と霰とに溝を穿たれた麥畑が、損はれて穂を方々に交じへてゐた。實つた黄いろ穂先は、泥のなかに、穀を取られてゐた。小鳥は飛び立つて、損はれた收穫物のなかに羽音をさせながら、廻りに麥を飛ばしてゐた。澄み渡つた空の下に太陽が輝き渡つて、この荒れた有様は悲しかった。その亡びた畑を前にして、昔の風

俗をして、身長の高い、大きい百姓が、黙つてこの有様を眺めてゐた。彼の顔に眞の苦痛があつた。同時に、打ち臥した麥に覆はれた、地面が何時になつても、生として、豊饒で、忠實である間は決して絶望してはならないと彼は考へてゐるやうに、諦めて沈着いた様子と、言ひ知らぬ、臍ろげな希望の色が見えてゐた。

佛蘭西の妖女

「被告、起て……」

と裁判長が言つた。

放火女連ひつけをんなの忌む可き席が動いた。何か唯ならぬ、震へるものが、留木の處へ来て坐わつた。それは檻樓と、穴と、紐と、古い花と、古い羽飾とで、その上に、興ざめた、濫色をして、皺だらけの、憐れな顔が出てゐた。その顔には黒い、小さな兩眼の性悪るさが、古壁の裂間に顫動する蜥蜴のやうに、皺の眞中で、びくびく動いてゐた。

「お前の姓名は何といふ……」

裁判官は訊ねた。

「メルジームと申します。」

「何んだ……」

放火女は、大それた厳かに

「メルジームです。」

と繰り返した。

龍騎兵大佐らしい立派な髭附の裁判長は、ちよいと微笑したが、眉を擡めずに言ひ續けた。

「幾歳か。」

「もう覚えてをりません。」

「職業は……」

「私は妖女です。」

すると傍聴席も、議席も、政府の委員自身も、噴きだした。併し其れは放火女

を狼狽ろうたひさせなかつた。室内に高く響いて、夢の聲のやうに、舞ひ降りる、震へがちな涼しい聲で、年寄としよりの放火女ひつけんなは、言ひ續けた。

「あゝ、佛蘭西の妖女たち、今、何處に居ませうか。皆んな死にました。

私は最後のものです。且那樣、私よりほかには誰も居りません。ほんとに

其れは大損害です。佛蘭西に妖女がゐました時分に佛蘭西は綺麗きれいでした。

私達、妖女は佛蘭西の詩味しまいでした。信念と、純潔と、青春せいしんでしたのに……

妖女の訪まづれる處は、何處でも、譬へば叢深い公園の奥でも、泉の石でも

古い御殿の塔でも、池の霧でも、大きい沼池でも、みな私たちの棲すまんでるせ

ゐで、不思議な、大げさな言ひ知らぬ趣おもむきを備へたのでした。古い言ひ傳へ

を調べて見ますと、私共は、到る處、月の光のなかに衣の裾すそを曳ひ摺り、ま

たは牧場で、草の穂先ほのきりを渡つてゐるのを御覽ごらんになつたさうです。百姓ども

は私達を愛して、敬つてゐたのでした。

子供らしい想像さうごから見ますと、私達、妖女の額は眞珠まゆで埋られ、杖も紡

鍾も不思議なものでしたから、崇拜のなかにも、聊か怖れが交つてをりました。それゆゑ私どもの棲む泉は何時も綺麗でした。荷車は私どもが護つてゐる道で停まりました。私どもは古いものを尊敬してをりますので、私たちが世界の最古のものは、佛蘭西國の隅から、隅まで、森林を大きくし、石は自から碎けさせました。

併し時代は進みました。鐵道がやつてきました。隧道を掘り、池を埋めて、私たちが何處へ身をかくして好いやら解らないほど、樹木を伐り倒しました。だん／＼百姓が私達を信じなくなりました。

夕方、私達が戸を叩きますと、ロバンが

「風です……」

と言つて、また睡りだしました。女達は私たちの泉にきて、洗濯を致しました。その時から、もう私達に取つては到底、駄目とまでした。私たちは世の人の信仰を生命としてをりましたから、その信仰を失ひましたは、總ての

ものを失つたのでした。杖の靈驗もなくなりました。私たちは權力のある女王であるにしろ、もう、今は人に忘れられた、妖女のやうに、人の悪い、皺だらけの老婆になりました。そのせゐで、もう御飯を喰べることも出来ませんし、兩手は何うして好いやら解りません。

暫くの間、私どもは枯れ木の荷を曳摺つたり、道ばたで落穂を拾つてゐたのを御覽になりました。けれども森の番人は冷酷で、百姓は私どもに石を投げました。

すると故郷では、もう暮らすことの出来なくなつた貧乏人のやうに、私どもは大い町へ往つて、仕事をして、暮らさうと致しました。

紡績工場に這入つた者もありました。ほかのものは、冬の頃、橋の袂で林檎を賣りましたし、また教會の門前で珠數を賣りました。また橙の實を積んだ荷車を押してゆきました。また一錢ほどの花輪を通りかゝりの人に賣り附けましたが、欲しがめる人はありませんでした。子供たちは私達の願ねが

が、ぐらつくのを嘲笑かつかみしました。巡查は私達を追ひだして、乗合馬車は、私
 たちを倒しました。すると、病氣にかゝつて萬事不自由の身となり、頭に
 救濟院の布とつけました。かうして佛蘭西は、妖女をすつかり殺してしま
 ひました。そのせゐで佛蘭西は大そう罰を受けたのでした。

さうですとも……皆さん。お笑ひなさい。現在、妖女のない國は何んな
 ものですか 御覽になりましたか。

人を嘲笑する百姓ども残らずプロシヤ兵にパン箱を開けてやりましたし
 道も教へてやりました。もうロパンは妖術を信じません。併し彼は祖國を
 も信じません。若し私達が佛蘭西に居りましたら、佛蘭西に這入つてきた
 プロシヤ兵を一人として生きては歸してやりません。

私どもの燐火が、プロシヤ兵を沼地に連れていつたかも知れません。私
 どもの名を持つてゐる純粹な泉の中に、プロシヤ人を狂者きんがひにさせる不思議
 な飲物を交ぜたかも知れません。月の光を浴びながら、會議を開いて私達

は、不思議な言葉で、モルトケ將軍の猫のやうな眼が、決して辨別するこ
 との出来ないほど、充分に、道や、河を混同し、荆棘や、叢や、プロシヤ
 兵が何時も出かけて屈んでゐる林のなかを叢や、荆棘で、すつかり入れ交
 ぜておきましたのに……私どもと一緒になら百姓たちも歩みましたのです。

……私どもの棲んでゐる池の大きい花で、傷の鎮靜薬を持へて上げました
 かも知れません。キリスト様は私どもを使つて、綿撒薬をお教へになつた
 かも知れません。……戦場で、死にかゝつた兵卒は、故郷の妖女が、林の
 片隅や、道の曲りかどか、何處かで故郷を思ひ出させるものを見ようとし
 て、半ば閉ざした眼の上に凭りかゝるのを見た筈でした。國の戦や、神聖
 な戦争をしたときは、其通りでした。併し、あゝ、信仰のない國では、妖
 女のない國では、斯かる神聖な戦争は到底、有りません。

と放火女の、細い聲が、ちよつと途切れた。すると裁判長は、言つた。
 「いくらそんなことを言つても お前の言葉は兵卒がお前を捉へた時、お前

が持つてゐた石油でやつた罪とは關係がない。」
 放火女は、また言ひだした。

「旦那様、私は巴里を焼きました。巴里が嫌びだから焼いたので御座います。巴里は何か嘲けつて、私たちの仲間を殺しましたから巴里を焼きました。さうして私どもの棲んでる靈泉を分析させようとして學者を寄越し、鐵と硫黄の含量を精確に知つたのも、巴里の仕業でした。芝居の上で、私達を嘲笑するのも巴里です。私どもの呪法は、技巧おろちやとなり、私どもの奇蹟は戯談となつてしまひました。私たちを見れば、笑はずには居られないほど澤山な卑しい顔が、ベンガル火に照らされ、月光の中央で、私どもが着てゐる桃色の着物のなかに、翼のついた車のなかに過ぎたのを見ました。

名で知つてゐて、私達を愛して、すこし怖かる子供があります。併し、挿繪入、金表装の立派な本を讀んで、子供は妖女の歴史を知るのですが、その本の代りに、巴里は幼稚な科學書を子供の兩手に置いてしまひました。倦

怠が薄黒い埃のやうに起つて、快よい子供の眼のなかに妖女の御殿と、不思議な鏡とを消してしまふ大い本を子供に持たせたのでした。

あゝ、さうですとも……巴里が焼けたら、ほんとに嬉しいのです。箱の中に放火女を入れて、私自身で好い場所に連れて行つて、

「さあ、皆んな、何んでも焼いておしまひ……」

と言つたのは此の私でした。

と放火犯の女は、大そう落ち着いて言つた。

「まづたく此の婆さんは狂者きちがひだ。連れていけ……」
 と裁判長がいつた。

ペール・ラシーズの戦

番人は笑ひだした。

「此處で戦争が有つたつて……戦争なんか有るものか。新聞の嘘さ。起つた事は此んなことに過ぎないのだ。二十二日の晩、そりや日曜だつた。三十名ほどの砲兵と、新式の機關銃が到着した。さうして墓地の高地に陣を占めた。さうして俺は此の小隊を見張つてゐたから、奴等に應對した。撤弾砲は番人小屋のそばに在つた。

砲は、やゝ低い處で平臺の上にあつた。砲兵が着くと、深山の禮拜堂を開けてやらなければならなかつた。砲兵たちは、何んでも壊はして、持つ

て行つてしまふたと思ひ込んでゐた。けれども、その隊長は、立派に取締つて呉れたのだ。それで隊長は、砲兵の廻りに、立つて、

「何んて最先に手をかけた馬鹿者は、酷い目に逢はずぞ……別れ……」と、軽く訓示をした。

その隊長はクリミヤと伊太利戦争の勳章をつけて眞白な年寄だつたよ。さうして優しい様子はしてゐなかつた。砲兵たちは命令を固く守つた。墓場からは何にも盗まなかつた。モルニー公爵の十字架も取らなかつた。それや唯つた一つ、二千フランの値打があるのだ……

併しコンミューンの砲兵は、ほんとに卑しい奴等の集まりだ。奴等は給料ばかり取りたがつてる古物の砲手だ。

墓地でやつてゐた奴等の生活を見るが好い。奴等はモルニーや、ファヴロースや、菜場の洞穴、皇帝の乳母の亡骸が埋まつてゐる美しいファブロンヌのなかに寝そべつてゐた。泉のあるシャンポーなかに葡萄酒を注いだ。

一晩ぢう彼奴等は飲めや、唄への大騒ぎさ。それから女を呼びにやりやがつた。此墓地に埋つてゐる死んだ人達は、淫らな事を聞いたに違ひないよ。だが彼奴等あいつらは不器用のくせに、巴里に損害を與へやがつた。奴等の陣地は好かつたのだ。とき／＼ルーブル美術館に向つて打て……ポール・ロリイヤルに向つて打てといふ命令がやつてきた。

すると年とつた隊長は大砲を照準させた。爆裂弾は巴里の上を眞直に飛んでいつた。下の方に起つてゐたことは誰れも知らない。射撃の近くのかだん／＼聞えてゐた。けれども同盟軍は、ちつとも心配はしてゐなかつたよ。シヤモンやモンコルトルや、ペール・ラシエーズの十字架では、ヴルサイス人は這入つて來られまいと思はれた。そして奴等を驚かしたのは最初の爆裂弾さ。そりや海軍がモンマントルの岡に着くと、發射して呉れた爆裂弾だつた。

そんなことは夢にも待ち設けてゐなかつた。

俺も奴等の仲間に入つて、モルニの御墓に凭つかゝりながら、煙草を吸つてゐた。爆裂弾の來る音を聞きながら、やつと地面ちべたに打伏うつぶすことが出來たのさ。それで砲手達は射撃の間違か、仲間が飲んだくれて、此んな事をするのだと思つてゐた。

だが待つて御覽、五分ほど立つと、モンマルトルが炎をだした。また爆裂弾が、最初の奴ほど眞直に落ちてきやがつた。この墓地にゐた砲兵は大砲や機關銃を据ゑたまゝで、大急ぎで逃げだしたのに違ひない。墓地は然んなに廣くなかつた。奴等は「脊むかれた。脊むかれた。」と叫んでゐたよ。年を取つた砲兵隊長ばかりは爆裂弾の下に取り残されて、砲兵中隊中の綺麗な鬼のやうに、あばれてゐた。さうして砲手が彼を置き去りにしたのが口惜しくつて泣いてゐた。

けれども夕方になると、給金支拂の時刻に、二三人歸つてきた。まあ、君、俺の番小屋を見給へ。その晩、給金を貰ひに來た奴の名が書いてある

よ。砲兵隊長は彼奴等（まやつら）を呼んで、だん／＼書き込んでやつた、
「シタンヌ、出勤、シーデイラス、出勤、ビョー・ビヨン……」
と書いてやつた。

君が見る通り、四五名の奴等きや居なかつたよ。だが奴等は女を連れて
ゐやがつた。俺や、この支拂日の晩を決して忘れるもんか。

下では巴里が燃えてゐた。市廳、穀物倉が燃えてゐた。ペール・ラシー
ズでは眞晝のやうに克く見えた。同盟軍はまた砲撃しようとも試みてゐた。
併し奴等は、あんまり澤山居なかつた。それからモンマルトルが怖はかつ
た。すると奴等は墳墓の洞窟に這入つて、女と飲み始めて、歌ひだした。
あの砲兵隊長はファヴロンヌ墓に着いた二つの大い石像の間に、坐はつて
ゐた。さうして怖しく燃えてゐる巴里を見てゐた。これが巴里の最後の夜
かと彼が思つてゐるらしかつた。

この時刻から、どういふ事が起つたか先は知らない。それで俺は家に歸

つた。あの樹蔭にかくれた、君にも見えるバラツクのなかに這入つたのさ。
俺は大へん草臥（くたば）れてゐた。さうして嵐の晩のやうに、洋燈（おかり）の燈を見詰めな
がら、すつかり着物を着て、寢床の上に坐はつてゐた。すると俄かに戸を
叩く音が聞えた。俺の嬢はぶる／＼震へながら戸を開けようとした。俺達
は同盟軍の奴等が來たのだと思つてゐた。處が海軍の奴等だ。

司令官と士官と醫者がやつてきた。

「起きろ 珈琲を拵へて呉れ。」
と言ふのだ。

俺は起き上つて珈琲を拵へてやつた。すると墓場中の亡者どもが神の判
斷をきくために目を醒ましたまゝに、墓場から瞬と、がさ／＼物の動く音
とが聞えてゐた。

將校連は立ちながら、さつ／＼と飲んだ。それから俺を外へ引張りだし
た。戸外（おもて）は兵卒や、水兵に充ちてゐた。それから俺を分隊の先頭に立たし

めた。さうして俺と嬢は墓ごとにつく／＼墓地を掃いてやった。とき／＼兵卒どもは葉の動くのを見て、小道の奥に立てる此像や、鐵柵に發砲した。其處そこ此處では、禮拜堂のなかに隠くれた逃げそくないの不幸者を見つけだした。その争も永くは掛らなかつた。砲手たちに起つたことは斯うななさ。番人小屋の前には、砲兵達が女と一緒に皆んな居たのだ。そのうちに勳章を帯びた砲兵隊長も居たよ。

こんな寒い日に、そんな様子を見るのは面白くないさ。

だが一ばん俺を、ぎよつとさせたのは、國民軍が一晩明かしたロケットの牢屋から長い列になつてその時連れ出される様子だつたよ。それで奴等は、葬式のやうに、すつと大通りを上つて往つたよ。一言も聞えないし、一の不幸も聞えなかつた。可哀さうに奴等はそれほど気がふさがつて、くよくよしてゐたのだ。歩きながら居睡りをしてる奴等もあつたよ。もう直き死ぬのだと思ふ考が、奴等の目を醒まさなかつた。奴等を墓地の奥へ通

してやつた。すると銃殺の射撃が起つた。それが長く續いたか何うか考へて御覽よ。みんなペール・ラシエーズの戦といふのは、此の銃殺の事なのだ……」

此處まで話して來ると、番人は、憲兵中隊長のやつて來るのを見かけて、俄に私のそばを離れた。私は獨りぼつちで、番兵小舎は、巴里の焼けてる時刻に、最後の月給支拂を受ける姓名の書かれたのを見てゐた。

私は、爆裂彈が往來し、火と焔とで眞赤になつた五月の其夜を思ひだした。お祭のある町のやうに、照り渡つた淋しい大墓地と、四つ角の中央に放棄された大砲と、その周りに開いた墓地の洞穴と、墳石中の暴飲と、そのそばには、圓屋根や、柱の雜然として、石像や、焔が飛び上がるせゐで生々としてきた石像中で、廣額で、眼が大きく、ちつと見詰めてゐたハルザツクの像を思ひだした。

渡 船

戦争前には、美しい橋が懸つてゐた。それは白石造の橋臺で、瀝青塗の鐵鋼とて出来上つてゐた。その鋼はセーヌ河の上に、風船や船舶を、かくも美しく見せる空中の光景の中に並んで居た。日に二度づゝ通ふ蒸汽船が中央の大きい橋門を通るには、煙を渦巻かせて煙筒を倒す必要もない。

兩岸には、晒布棒、洗濯女の椅子、鑲に結んだ釣舟、などがあつた。さうして楊柳の小道が牧場の間に列つてゐた。それは鮮やかな水に動く大い緑の幕が、橋に續くやうであつた。それは美景であつた。

154

今年は、すっかり變つてしまつた。楊柳は、昔しながらになつてゐるが、今は

155

空地あきちに續いてゐた。もう橋も無かつた。二の橋臺は、そばの石を飛ばして飛び去つてしまつた。たゞ四邊の石が残つてゐた。

橋錢を受取る白塗の小屋が、震動で半ば壊はれて、防障か、破壊めいた、新しい廢墟の様子をしてゐた。金網も、鐵條も悲しく水に浸かつてゐた。砂のなかに落ちた橋板は水中で、大い船の船頭に、知らせるために、赤い旗を立てた漂流物めいたものを拵へてゐた。セーヌ河が流してくる切取られた草や、苔の生えた板が、渦巻と激浪に充ちた橋の壊はれに堰セき止められてゐた。

景色のなかには、もの足りない、豁然とした、凶兆らしきものがあつた。水平線を飽くまで悲しく見せるためには、橋に續く小徑が明るくなつてゐた。あんな生ひ繁つた美しい楊柳は、蛭に天邊まで食ひ盡されてゐた。——楊柳も侵入を受けたのだ——さうして芽もない、折れた、瘦せ枝を伸ばしてゐた。役に立たない、人影のない並木通では、白い大きな蝶が、重苦しく飛んでゐた。

橋の架懸か濟む間は、當分、近かまに渡船を備へ付けた。それは素晴しく大い

渡船の一つで、馬車や、鋤を着けたまゝの馬や、水を見たり、水の動くのを見ると、おとなしい眼を圓くする牝牛などを積み込む渡船であつた。

動物と車とが彼の船の中央を占めた。それに、百姓や、町の學校へゆく子供や、田舎ずまひの巴里人が乗つてゐたのであつた。覆面やりボンが馬のそばで齧つてゐた。難船人をのせた船のやうであつた。

渡し船が徐ろに進んでゆく。渡るには、あんなに長いセーヌ河が昔よりも長いやうであつた。殆ど昔と變り果てた兩岸の間に、流れ去つた橋跡の後には、水平線が悲しい、嚴かな様子をして擴がつてゐた。

その朝、私は河を渡るのに、大そう早くから着てゐた。まだ岸には人影が見えなかつた。濡れた砂の上に、じつと立つた古い車のやうな渡守の小屋は閉まつてゐて霧に輝いてゐたなかでは、子供の咳せきが聞えてゐた。

「おゝい……イユミエーヌ。」

「はい。はい。」

と渡守は言つた。

彼は身體を手摺りながらやつてきた。それは、まだ、かなり若い立派な船頭であつた。彼は普佛戰爭に、砲兵として仕へたのであつた。脚に爆裂彈を受け、顔は創だらけになつて、リュマチで身體が利かなくなつて歸つてきたのであつた。

渡守は私を見ると、にこやかに笑つた。

「旦那、今日は込みませんよ。」

と彼は言つた。

ほんとに船のなかでは、獨りぼつちであつた。併し彼が纜を解かないうちに、人がやつてきた。最初には、涼しい眼付をした百姓女で市場の歸りであつた。二つの籠を抱いてゐた。その籠は田舎育ちの身體を眞直にして、しつかりと、眞直に歩かした。百姓女の後にあたる窪んだ道には、ほかの旅人がゐた。その人達の聲も聞えなし、霧のなかから微かに見えた。

「あ、シヤチギオーの旦那さん。どうか願ひます。……もう働いてをりますよ。……御延ばし下さい……さう頼んでをりますから……」

といふのは、優しい、涙に充ちた女の聲であつた。

「俺りや随分、のばしてやるのだ。もうすこし延ばしてやる……もう執達吏に係り合つてゐるのだ……彼奴は思ひ通りにやるよ……あゝ、ユーージェン……」

と年老いた百姓の聲が答へた。

「そりや、シヤジギオーの馬鹿野郎さ……そら、そら……」

と渡守は低聲で言つた。

すると、悪い羅紗の禮服を妙に着て、大へん山の高い絹帽を被つた大い年寄の岸にきたのが目に這入つた。

この瘦せこけて、よぼ／＼した百姓の手は、鋤を持つたせゐで、形が變はり、

立派な服を着けたので、平生よりも黒く、日に焼けて見えた。頑固らしい顔、印度の壯士みだいに鈎形をした鼻、傲慢な口、皺のよつた口がシヤシギオーといふ名によく似合つた猛ましい顔付を見せてゐた。

「さあ、ユーージェンや、さあ、船をだせ。」

と彼は渡し船に飛び込みながら言つた。彼の聲は怒から震へてゐた。渡守が船を出さない間に、あの百姓女は、彼に近づいて、

「そんなら誰に怒つてるのかい……シキシギオー様。」
と訊ねた。

「やあ、お前か、ブランシュ……愚圖々々云ふなよ。俺は怒つてゐるのだ……そりやマデリエーの馬鹿どもさうだ……」

と百姓は言つた。

さうして彼は、拳で斉ちな、小さい人影を示した。その人影は、啜り泣きながら、回んだ道を昇つていつた。

「あの人は何をしていたのですか。」

「彼奴等は俺の家賃を四月ぶりと、葡萄酒を借りてゐるのに一錢も拂はない。それだから俺は是から直ぐ執達吏の處へいつて、往來に奴等を、みんな投げだして貰ふのだ……」

「だつてマジリエは善い人だ、お前に借金を拂はないほかには、何の悪いこともしないよ。……今年は大へん損をした人が多い……」

之を聞いて年を取つた百姓は、怒鳴りだした。

「そりや馬鹿よ。……マジリエの奴はプロシヤ兵で、一儲け出来たのにさ……彼奴にや、そんな氣がないのだ……プロシヤの兵隊がきた日から、銘酒屋をしめて看板を下して仕舞つた……ほかの珈琲店の奴等は戦争中大儲をしたぞ。彼奴は一錢も珈琲をプロシヤの兵隊に賣りやしない。それも、まだ悪いや、プロシヤの奴等に亂暴をやつたもんで、牢屋へ、ぶち込まれやがつた……ほんとに馬鹿なことさ。……なにも彼奴に係はることぢ

やあるまいし、そんな話はな。……彼奴は軍人かい……軍人でなきや葡萄酒やブランデーを、プロシヤの兵隊に飲ませりや好いに……そうすりや今頃は俺に借金が拂へるのに……馬鹿野郎……愛國者の態は此んなものだ……」

と年寄の百姓は、眞赤になつて憤慨しながら、彼は野卑な身振をして、^{フロツク}禮服のなかで、ふくれてゐた。

彼が話すのに隨れて、さつきまでマジリエ家の人達に對する同情に充ちてゐた百姓女の涼しい眼が乾いてきて、殆ど人を馬鹿にするやうな様子をしてゐた。彼女も、やつぱり百姓女であつた。斯かる人達は金儲を拒むやうな人達ではなかつた。最初に百姓女は言つた。

「女は不仕合せのことさねえ……」

と言つて、それから、

「ほんとに然らだ……金儲の場合を外づしちやいけない……」と言つた。

「貴方の御言葉は尤もですよ。借金してる時にや、返さなきや可いけない……」

これが百姓女の結論であつた。するとシヤシキオー老爺は、いつも齒を食ひし
ばつて、

「馬鹿め、馬鹿め……」

と言つてゐた。

舷に沿うて竿を使つてゐた渡守は、すかり聴きながら、口を出さなければなら
ないと考へた。

「シヤシキオー老爺さん。そんな人の悪いことをしなさんな……執達吏の
處へ寄つて何の役に立つかい。あの貧乏の人達に何か賣たらせた方が早く片
付くよ。まあ、待ちなさい。ほかに手段てだもあるのだから……」

と渡守は言つた。

するとシヤシキオーは嘯み附かれたやうに振り向いた。

「お前などが愚圖々々言つたつて何になるかい。お前も愛國者くにがもひの一人かよ。
ほんとに氣の毒なものよ。子供が五人あつて、一錢の錢もありやしねえ。
ねえ旦那様（此處では私に言ひかけたらしい）それが何の甲斐になりますか
い。たとへば、彼奴は、持つてゐた身代を無くして、今は、ボヘミヤ人の
やうに暮してるといふ次第さ。病氣になつた子供や、洗濯で、やつれた噂と
一緒にバラックへ住まつてゐるのだ。……ほんとに彼奴あいつは馬鹿ぢやありま
せんかい。」

とシヤシキオーは言つた。

渡守は嚇つと腹を立てたらしい。

黄ろい顔の眞中で、彼の傷跡が、廣く、白く掘られた。併し後は、ぢつと我慢
をして、棹が振ねぢれるまで、砂地に深く突き込んで、怒りを晴らしてゐた。彼が
言ひ過ぎたら渡守の職まで失つてしまふかも知れない。何故と言へば、このシヤ
シキオー老人は田舎で權力を持つてゐたから……

彼は村會議員なのだ。

八月十五日の授勳者

アルシエリヤの出来事であつた。狩獵の一日が終つた夕方、オルンアンヴィから四里ほど隔つたシエソフの平野のなかで、私は烈しい嵐に襲はれた。

村の影も、隊商小舎の影も見えない。小さい棕櫚の樹と、乳香樹の深い林と、地平線の端まで遙々と耕された廣い地面のあるばかりであつた。そのシエリフ河は夕立に水量を増して怖しく唸りだした。私は沼地の真中で一晩明かすやうな危い目にあはうとした。幸にも連れ立つてゐたシリアナ官省の通譯が、すぐそばの岡かげにかくれてゐた種族の首領と知つてゐた。彼は、ふと夫れを思ひ出した。それで私達は、その首領のところへ往つて、一夜の宿りを求めようと決めてしま

つた。
 平野に在るアラビヤの村落は、バルバリーの無花果や、仙人掌のなかに隠れて、草廠が目に入らないうちに、村落の中央にあるほど、乾いた土の草廠が、地平とすれ／＼に立つて居た。併し此の土地が大へん悲しく思はれて、「生命」の懸つてゐた苦痛の足許にゐるやうな氣がした。

四方の畑では、收穫が打ち棄てられてゐた。麥も大麥も畑の中に臥^ねてゐて、腐りかけてゐた。雨のしたに置去られた碎土肥が錆いて並んでゐた。種族が悉く衰へた、悲しい様子と、無頓着な様子をしてゐた。私達の近づくのを見て犬が吠えるのも、やつとの事であつた。とき／＼草小屋の奥で、子供の泣聲が聞えた。林のなかを子供の刺つた頭の通るのを見かけた。彼方此方では叢のなかに小さい驢馬が震へてゐた。併し一匹の馬も、ひとりの男もない。それはまた大戦争中にゐて數月前から騎兵が悉く出征したやうに思はれた。

首領の家は、窓のない、白壁の長く續いた百姓家めいてゐて、他の家と同じく

活氣を帯びてゐなかつた。私達は開け放した厩や、小さい厩や、からつぽな^{まじまじ}株槽を見つけたのだが、私達を迎へて呉れる馬丁もなかつた。

「さあ、モール人の珈琲店を見に往きませう……」

と連れの通譯が言つた。

モール人の珈琲店と言ふものは、アラビヤ城主の應接室のやうであつた。それは通り掛りの御客に取つておく家のなかの、また家で、それほど善良で鄭重な回教徒が、法律の命ずるまゝに、家庭的の親しみを懐いて、他人に宿泊を與へる徳義を行ふのであつた。

首領の名はシ・スリマンといつて、彼の開いてゐた珈琲店は、厩のやうに森んとしてゐた。漆喰に繪をかけた高い壁、武器の戦利品、駝鳥の羽毛、部屋の周圍にある廣い樽、それ等のものが悉く陸風に戸から吹き出される雨のもとに光つてゐた。併し珈琲店のなかには人がゐた。ひつくりかへした火鉢のそばで、珈琲を拵へてゐた年寄のカビールが^{ぼつ}縷を着て、膝の間に頭を入れてゐた。蒼ざめた、

熱のある息子が、黒い外套にくるまり、足もとの大い二匹の獵犬と一緒に、褥の上に臥てゐた。

私達が這入つても、身體を動かす者もない。唯だ一匹の獵犬が頭を動かしたのと、子供が、熱を帯びた、疲れた美しい片眼を私達の方へ動かしたばかりであつた。

「シスリマンは……」

と私の通譯が言つた。

すると息子は頭で、遠い／＼地平線を示しながら曖昧な身振をした。シスリマンが長旅に出掛けたのと解つた。併し雨のせゐで、もう歩きだすことは出来なから、私の通譯は子供にアラビヤ語で談しかけて、私どもは、父さんの友達であるから明日まで宿を貸して呉れと頼んだのであつた。

それゆゑ息子は、身體の焼けるやうな熱にも拘らず、起き上つて、カビールに言ひつけ、「貴方がたは家の御客様です」といふやうに、丁寧に褥を示しながら、頭を下げ、指の先をなめて、アラビヤ風の御辭儀をした。さうして外套に身をく

るんで、アラビヤ士官らしく、また一家の主人らしい様子をして、業々しく出ていつた。

そのかぎで、珈琲を拵へてゐた年寄のカビールが、火鉢に火をつけ直して、ごく小さい湯沸しをかけた。さうして彼が珈琲の支度をしてる間に、シスリマンの旅行に關して細ま／＼聞きとることが出来た。この種族が妙に打ち棄てられる、理由も聞きだすことが出来た。

カビールは喉にかゝる音で、老婆らしい身振をしながら、早口で話した。森とした間に、急ぎ込んだり、途切れたりした言葉で話した。その森としてる間には内庭のモザックに注ぐ雨の音、ごと／＼煮えたつ湯沸かしの音、野原に幾千となく擴がった山犬の鳴聲が聞えてゐた。

可哀さらにシスリマンに起つたことは斯うであつた。四月まへの八月十五日に彼は有名なレジオン・ド・メールの勳章を貰つた。それは暫らく待ち抜いてゐたとのことであつた。この土地で彼ばかりが此の勳章を持つてゐなかつた。ほか

のものは誰れでも、騎兵將校であつた。二三名は軍服の周はりに司令官たる大い
 綬章を下げてゐて、私が幾度もバック・アシユ・ブーアレムで見たやうに、無邪
 氣に洩をかんでた。

これまでシスリマンが勳章を貰ふ邪魔となつてゐたことは、カルタ遊びの擧
 句、アラビヤ省の長官と喧嘩をしたせゐであつた。軍人の友誼は、このアルシエ
 リヤでは大へん深いものであつた。十年このかたシスリマンの名が建議表に書か
 れてゐたほどであつた。けれども其の願は叶はなかつた。それゆゑ八月十五日の
 朝、オルレアンヴィルの守備兵が小さい金塗の箱と、有勳章の免狀を持つてきて、
 四人の妻の中で一ばん可愛い妻のバイアの手から一駱駝の外套に、佛蘭西の十字
 勳章を着けて貰らつた時に、シスリマンの歎びは何ほどであつたか想像が出来
 よう。

その頃は、この種族の、斷間ない御祭騒ぎの時機であつた。一晚中、太鼓や、
 蘆の笛が響いてゐた。舞踏や、歡の花火、幾千とも知れず殺された羊があつた。

御祭に缺けたものが無いやうに、タンテルの即席辯士が、シスリマンの名譽を祝
 つて「來い、吉報を傳へる爲めに、馬を着ける」といふので始まる立派な歌
 を拵へた。

翌日、夜あけにシスリマンは、武装した種族の總軍を呼び寄せた。さうして總
 督に御禮をいふために、部下の兵士と一緒にアルジェーに出かけた。

市の門前で、シスリマンの兵士は、習慣に従つて停まつた。さうしてシスマリ
 ンは唯つた一人で總督の御殿へ行つた。さうしてマラコッフ公爵に逢ひ、東洋式
 の壯麗な文句で佛蘭西に對して奉公を誓つた。それは形容の多い文章であつた。
 何故と言へば三千年以來、若い男は棕櫚の樹に比較され、女は馴鹿に比較されて
 ゐたのだから……。

さてシスリマンはこの義務を盡してから、彼は小高い町に昇ぼつて、皆に見て
 貰ひたかつた。さうして通りかゝりに、回教の御堂へ立ち寄りて、信心を行ひ、
 貧乏人には金を分ち、理髮屋に這入り、妻の土産に香水と、花と模様を染めた絹

布や、金散らしの紺の胸當と、倅の土産には、赤い騎兵の長靴を値ぎらずに拂つて、綺麗な錢で歡びをふり撒いた。彼がスシルの敷物に坐はつて、勸工場にゐたり、モール商人の門口で珈琲を飲んだりしてゐるのを見かけた。モール人の商人あきんどは彼に御祝を言つてゐた。彼の周りには野次馬がたかつて「天子様が、あの人に勳章を下さつた。」と言つてゐた。

モールの小娘たちは、御湯から歸つてきて、煌粉を喰べながら、あれほど誇りに、下げられた美しい銀の十字勳章を、ちつと見詰めながら、白い假面を被ぶつて駈けてゐた。あゝ、人間といふものは生涯に一ぺん好い時があるものだ。

夕方になつたので、シスリマンは部下の軍に落ち合はうと思つた。彼がもう鎧に足を入れてゐると、總督府の使者が息せき切つてやつてきた。

「茲にお居でゐしたか、方々、探してをりました。早く入らしやい、總督閣下が御話し申したいさうです。」

シスリマンは平氣でこの使者の後から蹤いていつた。併し總督府の大い中庭を

通つてゐると、あの喧嘩をした役所の長官に出逢つた。彼は人の悪い微笑をもらした。

この嫌やな微笑がシスリマンをぞつとさせた。

彼は慄へながら、總督の應接間に通つた。總督は椅子に跨つて彼を應接した。

總督は何時もの荒々しさと、周囲のものに震動を傳へる名高い鼻聲で、

「シスリマン君、御氣毒だが……間違つてゐたよ……勳章をやりたいのはお前ぢやないのだ。そりやスーズーの會長にやるのだ……勳章を返さなきやいけないよ。」

と云つた。

シスリマンの黄銅色をした立派な頭が、鍛冶場の火でも近づけてやつたやうに、赤くなつた。拘彎運動が身體を揺つた。彼の目は輝いた。併し、それは暫時の光に過ぎなかつた。

彼は直ぐさま俯向いて、總督の前に身體を屈めた。

「閣下は長官です。」
と彼は總督に言つて、胸から勳章を取り去つた。さうして机の上に置いた。彼の手は震へてゐた。彼の長い睫毛には涙が溜つてゐた。年老いたペリシエ總督も感に打たれた。

「さあ、しつかりしろ。來年は勳章を貰へよう……」
と言つて、總督は、善良な子供らしい様子で、手をさしだした。

シスリマンは總督の差し出した手を見ないふりをして、返辭もせず立ち去つた。彼は總督の約束の當にならないのを知つてゐた。さうして役所の狂言に掛つて、生涯、不面目な事をしたと思つてゐた。

不面目の噂が、もう町に擴がつた。ハブ・アズーン町の猶太人が彼の通るのを見ながら、嘲けつてゐた。之に引かへモール人の商人は、氣の毒だと言ふ風に顔をむけた。かう氣の毒だと思はれるのは嘲けられるのより辛らかつた。

彼は石崖に沿うて、最も暗い小路を探してゐた。勳章を取り去つた胸のあとが、

創口のやうに痛かつた。彼は絶えず、

「部下は何んと言はう。妻は何と言ふか知らん……」
と考へてゐた。

怒が燃えてきた。彼は何時も火災と戦闘とで眞赤なモロツコの國境で、神聖戰爭を豫言してゐるかと思はれた。或は猶太人を掠奪し、耶蘇教徒を虐殺し、彼れ自身が恥辱を隠すやうな大災難に陥つて、部下の先頭に立ちながら、アルジェの町を駈けてゐるかと思はれた。種族の居所に歸ることは何うして出来なかつた。

俄かに、復讐計畫の考中に「皇帝」といふ考が光のやうに迸つた。

皇帝……あらゆるアラビヤ人に取つての如く、シスリマンに取つても、正義と權力の考はこの言葉ばかりに集まつてゐた。それは廢頽期に屬する回教信徒の眞正な上長であつた。またスタンブルといふ言葉は、理性の人か、それとも侵し難い法王めいてゐるものやうに、遠くから思はれた。さうして法王は無限な力ばかり持つてゐて、大事な場合には斯かる權力の役に立たないことも知つてゐた。

併し皇帝は大きな大砲と守備兵を持ち、甲鐵の軍艦を備へてゐた。シスリマンが皇帝のことを考へると、救はれたやうに思つた。きつと皇帝は勳章を返して下さるに違ひない。それは一週間の旅仕事だ。

彼は部下の軍隊がアルジェの門戸で彼を待つてゐることゝ信じてゐた。翌日の便船は巴里をさして、シスリマンを連れていつた。それは敬虔と壯麗とに富んでゐて、メツクの聖地へ巡禮に出て立つやうであつた。

憐れなシスリマンよ。

彼が出發してから四月立つてしまつた。妻に與へた手紙のうちには、歸國のことが書いてなかつた、四月このかた、シスリマンは到處嘲弄され、佛國行政の怖しいほど錯綜してゐるなかに迷ひ、前室の木箱の上で外套を汚ごしながら、決して面會にきて呉れない面會を待ち設けて、役所から役所へと追ひ出され、あちら、こちらの官省を駈け廻はつてゐた。それから夜になると、威嚴があるために却つて滑稽な、悲しい、長い顔付をして、ホテルの部屋をあけて呉れるのを待つてゐ

た。それから彼は奔走に疲れて部屋に這入つた。併し傲然として、いつも希望に溺れ、賭博に負けた男のやうに名譽を回復しようとする熱心になつてゐた……

この間、故郷では、部下の騎兵が、東洋式の運命觀を懐きながら、ハブ・アゾーンの門で踞りながら、彼を待つてゐた。馬は繫がれたまゝ、海岸近くで嘶いてゐた。種族の中では、萬事が停滞してゐた。收穫物は刈り取る人がないので、そのまま枯れてしまつた。妻も子供も巴里の空を打ち仰ぎながら、目数を數へてゐた。いかほどの希望と、不安と、滅亡とが、もう赤いリボンの端に這入つてしまつたかと思ふと、まことに氣の毒であつた。何時になつたら、すつかり片附くことやら……

「神様が御存知なばかりだ……」

と珈琲を作るカビールは笑ひながら言つてゐた。

それから紫色をした淋しい野原の方に、半ば開いた戸口から、彼は素肌の腕を上げて濡れた大空に昇つてゐた白い、小さな弦月を示したのであつた。

前哨にて

(巴里包圍の追懐)

皆さんの之からお読みにならうとする抜き書は、前哨線を駆けながら、その日其の日に書きつけたものであつた。巴里の包圍がまた盛んであつた頃書きつけた手帳から一枚、書きだしたのである。それは皆な、膝の上で、ぞんざいに走り書をしたもので、爆裂弾の爆發のやうに、寸断されたものである。併し私は變へもせず、読み直しもしないで、そのまま御覽に供へる。もし書きかへたら嘘をならべ、面白味を添へて、すつかり興味をそぐと可けないから……

クルルメープにて、十二月のある朝

白堊質の、でこぼこした、よく響を傳へる白い、寒い平野。道の凍つた泥なかには横隊をした大隊が砲兵と一緒に入り交つて並んでゐた。物淋しい徐行進。戦はうとしてゐたのだ。士卒は銃を負革で擔つて、腕貫のなかにも、入れてるやうに、腕を外套に入れて、震へながら、頸垂れて、躓きながら行進してゐた。ときどき、

「止め……」

と叫んだ。

馬は怖れて嘶いた。彈藥箱は震へた。砲兵は鞍の上にて身を起しながら、心配さうに、ブルージェエの白い、大きな石垣を見てゐた。

「見えるかい」

と足先を温めようとして、靴底を踏みしめながら兵卒が尋ねた。

やがて「進め」……瞬くひまに集まつた人の波が、いつも徐ろに、いつも静かに流れていった。

アウヘルゲイル城砦の前面に當る地平線には、寒空がどんよりした朝日に染められてゐた。斯かる空と地平線上には、總督とその參謀との極く細微な集りが、日本の螺細工の上でもちらばつてゐるやうであつた。私のそばには道ばたに止まつた小鳥の群が夥しく飛んでゐた。それは野戦病院員であつた。外套の下に腕を組みながら立つて、謙遜な、誠實な、悲しい様子をして行軍するのを見てゐた。

同日

淋しい、打ち棄てられた村、開け放した家、壊はれた家根、死んだ眼のやうに私達を見詰めてゐる窓。

とき／＼萬物がある廢墟の一つに、何か動く音、足音と、戸の軋む音が聞えた。人が通ると、戦線の歩兵が、胡散臭い、窪んだ眼をして、闕の上にやつてきた……地を掘り探がす掠奪者、地面にかくれようとする逃亡人だ……

正午ごろ、百姓家に這入つた。この家は、空らつぽで、飾もなく、指先まで引

搔いたやうであつた。階下の部屋は、窓に戸もない大きな臺所で、養鶏場の方に開いてゐた。中庭の奥には生垣があつた。その後には遙る／＼と平野が連なつてゐた。片隅には石の螺旋階段があつた。私はその段に坐はつて、暫らく残つてゐた。その太陽と、萬物の静けさは、大そう快かつた。

日に元氣づいた初夏の大い蠅が二三匹、梁に沿うて天井で羽音を立てゝゐた。火の跡の見える暖爐の前に置かれた椅子は、凍つた血潮で赤くなつてゐた。まだほとぼりの残つた灰の片隅に、血潮に染まつた椅子は悲しい前目を物語つてゐた。

マルス河畔

十二月三日、モントルイユの門から出發。空は低く、寒い北風。霧。

モントルイユには人がゐない。戸も窓も閉まつてゐた。柵の後では、鷺鳥の鳴聲が聞えた。此所では百姓は逃げなかつた。かくれてゐた。

銘酒屋を見つけだした。地方別働隊兵士の二三名が朝飯をやつてゐた。静かに眼の膨れた、赤い顔をした。テーブルに眩を突きながら、可哀さうに別働隊の兵卒が、眠りながら喰べてゐた。

露營の煙で、紺色になつたヴァンセンヌの森を通つて、モントルイユから出かける途中であつた。兵卒は温を取らうとして、樹木を伐つてゐた。樺の樹や、移楊樹や秦皮の若樹を掘り返して、道ばたに美しい、金色の根毛を曳摺りながら、持つて行かれるのを見ると、憐れであつた。

ノージャンにも兵卒がゐた。それは大い外套にくるまつた砲兵達で、林檎のよりに眞圓の頬邊をしたノルマンデイの別働隊であつた。外套の頭巾を被つた輕装の小守備兵で二列になつた戦線兵であつた。青い手巾が頸のまはり軍帽の下にかくれてゐた。斯かる總てのものが、道に、うざく動き廻はつて、開け放しになつた香料商の戸口で押し合つてゐた。それはアルヂエリヤの小さい町のやうであつた。

それから平野であつた。淋しい、長い道がマルヌの方へ降りていった。眞珠色をした素晴らしい地平線、枯れた樹木が霧のなかで震つてゐた。奥には大鐵道の棧橋があつた、齒がないやうに切られた「せりもち」を見ると、悲しかつた。

ヘルーを通つて、道ばたの小さい別荘に這入つた。庭は荒れて、家も荒らされて、やつと殺戮を免れた、咲ききつた白い大輪の菊花のかけから、庭内を見ると悲しかつた。

私は鐵柵をあけて中に這入つた。併し菊花は摘み取る氣になれなかつたほど美しかつた。

畑を横切つて、マルヌに降りていった。水邊にいくると、顔を洗つた御日様が河をすつかり照らしてゐた。それは美しかつた。正面にはフツチ・ピリが見えた。前の日、あんなに戦つた處だ。其處の葡萄畑の眞中に、河邊で長閑かに家々が重ねてゐた。

河の此方岸には、蘆のなかに船が一隻あつた。河岸には一隊の兵卒が、對岸を

見ながら話し合つてゐた。それはサクソン人が歸つて來たか何うか、イフツチ・リーに派遣する搜索隊であつた。

私も搜索隊と一緒にいつた。小さい舟が通る間、後に坐つてゐた同僚が、低聲で私にかう言つた。

「シヤスホー式の銃が入るなら、フツチ・ブリーの役所に一杯あるよ。敵は戦線に立てゐた聯隊長を置き去りにして行つた。そりやブロンド色の髪をした女のやうに、白い肌をした大男だ。それから新しい赤革の長靴を残してあつた。」

彼の目を牽いたのは死んだ聯隊長の長靴であつた。彼は何時も繰り返してゐた。

「あゝ本當に、好い長靴だ。」

私に談しかけてから、彼の眼は輝いた。

フツチ・ブリーに這入らうとした途端に、石底の靴を穿いた水兵が、シヤスホー銃を五六挺、擔ひながら、小路から出てきて、私どもの方へ駆けながら、

「よく見たまへ、プロシヤ兵が來た。」と言つた。

私達は小さい石帷のかげに、堅くなつて、見詰めてゐた。

私達の頭の上で、葡萄樹の天邊から最先に見えたのは騎兵の一騎であつた。鞍の前に屈み、軍帽を被り、騎兵銃を手にして、茶番めいた影が見えた。それから他の騎兵が見えた。續いて歩兵が見えて這ひながら葡萄畑のなかに擴がつていつた。

その一人が……私達の極くそばで……樹のかげに坐つて動かない。海老色の外套をきた物凄い大男で、頭の廻りに手巾を捲いてゐた。私達のある處からでは、誠に恰好な射撃距離だ。けれども仕方がない。搜索隊はその役目を知つてゐた。すぐに船に急いだ。

船頭は愚圖々々言ひだした。併し私達は無事にマルメを過ぎた。すると向岸から息苦し聲が、

「おい……船だ、船。」
 叫ぶのが聞えた。

先刻の長靴好きな同僚と、三四名の同僚であつた。彼等は牧場の處まで行かうと試みた、が直ぐ歸つてきたのであつた。

船頭は見えなかつた。

「俺れにや漕げない……」

と搜索隊中の軍曹が言つた。彼は、私と一緒に水際に身を縮めてゐた。この間にも他の者は待ち切れなくなつて、

「やつて来い。やつて来い。」
 と言つてゐた。

行かなければならなかつた。酷しい役目だ。マルメ河は水勢が重つて激しかつた。私は一所懸命に漕いだ。さうして、始終、後手ではサクソレが樹かげから、凝つとして私の方を見詰めてるやうな気がした。

岸に着くと、一人の斥候が、船に水が遣入つたほど、激しく岸に飛び上がった。流される危険に出逢ずには、搜索隊を上陸させることが出来ないから、一ばん勇敢なものが岸の上で待つてゐた。それは佛國壯兵隊の伍長だ。素直なものであつた。青い軍服を着て、軍帽の前に小鳥をさしてゐた。私は彼を連れ歸りに往きたかつた、その兩岸で射撃が始まつた。

彼は黙まつて待つてゐた。それからシャンピギーに沿うて、岩壁を辿りながら歩いていった。彼は何うなつたか私は知らない。